
オモイノチカラ

ブナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイノチカラ

【Nコード】

N1004X

【作者名】

ブナ

【あらすじ】

とある不思議な力を持つ少女サリア。ある日、彼女が謎の人間たちに攫われてしまう。幼なじみであるカリクは、旅立ちを決意し、彼女を助けに町を発つ。

彼女の力に隠された秘密は何か。そして、カリクはサリアを助け出すことができるのか。

“心の力”を巡る、ファンタジー。

(以前モバゲーに挙げたものの大幅改変したのになります)

プロローグ『幼き日の記憶』(前書き)

・呼んでる。俺のことを、呼んでる・

プロローグ『幼き日の記憶』

小さな町の中心に、広場があつた。真ん中には噴水があり、地面には全面に白のタイルが敷き詰められている。夕焼けの赤に染まっていた。昼間は賑わうこの場所も、親と一緒に子供たちが帰りだす時間となると、人影はまばらだった。

子供たちが帰っていく中、噴水の前に、まだ五歳に届いていない少年と少女がいた。二人も、親の迎えを待っていた。少年の方が口を開く。

「あか。サリアは“か”だよ」

しりとりをしていた。サリアと呼ばれた少女が、口元に手を当てて、考え込む。

「じゃあねわたしはね……」

彼女は長く黙り込んだ。しばらくしてから、隣に座る少年の方を向く。

「どう、カリク？」

少女は少年の名前を呼んだ。しりとりの解答はない。そのはずなのに、

「カラスかー。じゃあ“す”だね」

しりとりが、続いた。少年が一人で勝手に進めているわけではない。しかし、少女はしりとりの返事をしていない。少女は、口に出さずに自分の解答を少年に伝えたのである。トリックがあつたわけではない。それが彼女の『力』だったのだ。二人共、まだその異常さに気づいていない。少年は、彼女が他の子供から避けられていることも理解していなかった。子供たち本人の意志ではなく、その親の意志なのだ。

二人の両親もちろんその異常さを知っていた。ただし他と違っていたのは、彼らはその『力』の正体も知っていることだった。

「ねえ、カリク」

「なに、サリア」

「わたし、このあいだこわいゆめをみたんだ」

少女は不安そうな顔をしてうつむいた。

「どんなゆめ？」

少年が尋ねる。彼女の顔を覗き込んだ。

「ひとりぼっちになったゆめ。カリクといっしょにいたのに、だれかにひっぱられて、なんにもみえないまっくらなところにおいてかれたの」

声が震えていた。思い出した光景が怖ろしかったのか、彼女は自分の身体を抱きしめる。

「だからね、わたし、いまもこわい。くらいとくに、ひとりぼっちになっちゃいそうで」

目に、涙が溜まっていた。

「だいじょうぶ！ そのときは、ぼくがサリアを助けてあげる！」

そんな彼女に対し、少年は立ち上がると、本で見たヒーローの動作を真似してから、大きな声で言い切った。

「ほんとに？」

「ほんとに！ サリアがひとりのときは、ぜったいたすけてあげる！」

「じゃあ、ゆびきりしよう？」

少女が小指を立てて、少年に向かって出した。

「うん！ やくそくするよ」

少年も小指を絡めて応える。

「ゆびきりげんまーうそついたら、はりせんぼんのーます。ゆびきったー！」

指を離し、子供たちは笑い合った。それから、しりとりを再開する。

これが、カリク＝シェードという少年の、一番古い記憶だった。

一章『招かねざる者たち』

学生で溢れる放課後の通りで、金髪黒目の少年が空を飛ぶ鳥を見ていた。足を止めて、目で動きを追う。そのうち鳥は見えなくなった。

目標を見失い、カリク＝シェードは前に向き直った。生まれつきの金色の髪は、肩には届いていないが、前髪が目にかかっている。その間から、黒い目が覗いていた。体格はやや小柄。ただし、体つきはしっかりしていて、非力ではない。年齢は、今年で十七になる。高等学校の生徒だった。明日からは夏休みが控えている。

周りの学生が通り過ぎていく中、立ち止まっているのは、人を待っているためだった。ほどなくして、後ろから声をかけられる。

「カリク、何してるの？」

振り返ると、空を思わせるような青い瞳が、カリクの目に映った。同い年で幼なじみである、サリア＝ミユルフのものだった。肩より長い黒髪を風になびかせている。カリクには及ばないものの、女子にしては背丈は高い。穏やかで柔らかい雰囲気を感じながら、問いかけに答える。

目の合ったカリクは、うつむき気味になりながら、問いかけに答える。

「ちょっと用事があるから、待ってたんだよ」

「用事って、私に？」

首をかしげたサリアに対し、カリクは頷いた。黒髪の少女が、苦笑する。

「わざわざ帰り道の途中で待たないで、学校で言ってくれればよかったのに」

「帰り出してから思い出したんだよ。だからここで待ってたただけだし、口調を強くする。これは嘘だった。本当は覚えていた。むしろ、一日中頭にあった。」

「じゃあ、そういうことにしといてあげるね」

それを察したのか、サリアはもう一度笑った。

「じゃあつて……。まあ、いいや。話は帰りながらするよ」

カリクは肩をすくめてから、歩き出した。サリアも横に並ぶ。カリクは、ほんの少しだけ間を空けた。

二人は家が近かった。しかし、最近はまだ一緒に帰っていない。原因はカリクにある。難しい理由ではない。ただ、気恥ずかしいからというだけのことだった。

カリクたちの住む国は、ラスタージ共和国という。世界に三つある大陸の一つにあり、その大陸の中では一番大きい国だった。三方が別の国と隣り合っているのだが、唯一南側は海と面しており、他の大陸との貿易も行われていた。

ラスタージ共和国は五つの都市を中心に発展している。東のニケア、西のルクス、南のレンバー、北のミリシアはそれぞれ東西南北の大都市だった。中央に位置する首都セルゲンティスは、さらに巨大な都市である。

二人が住んでいるのは、ニケアの近くにあるキュールという町だった。

「それで、用事って何？」

サリアが話を振った。黙り込んでいたカリクが、口を開く。

「そのまあ、明日から夏休みだろ」

「そうだね」

「その前に言っておきたいことがあつてな。一回帰ったら、“例の場所”に来てくれないか」

「いいよ。帰って着替えたら、すぐ行くね」

「ああ」

カリクがうなずき、また口を閉ざす。サリアが呼びかけてきた。
「カリク、色々話そうよ。最近、あんまり話してないし」

彼女はカリクを真っ直ぐに見つめてきた。口元には、穏やかな笑みを湛えている。カリクは、拒否できなかった。目は合わせずに、頭をかきながら、返答する。

「……そうだな」

「ありがと、カリク」

お礼を言われ、彼は頭をもうひとかきした。
それから二人は、他愛のない話をしながら、家路を歩いた。

カリクとサリアの後方に、人影があつた。ポロシャツにジーンズという簡単な私服を着た、二十代くらいの男である。細心の注意を払いながら、二人を付かず離れず追っていた。誰にも聞こえないようにつぶやく。

「あれが今回の任務の目標か。本当に力なんて持つてるのか？」

視線がサリアを捉える。男の目的は、彼女にあつた。しかし、続けてカリクにも目を向ける。

「それに、カリクか。あれが、あの人の息子なわけね」
ぶつぶつ言いながら、男は尾行を続けた。

カリクとサリアの家は、すぐ近くだった。先に彼女を家まで送った後、カリクは急いで自宅へ帰った。玄関のドアを勢いよく開けると、

「おお！ 帰ったか、カリク」

坊主頭の老人がいた。カリクは一瞬動きを止めてから、おもいきりドアを閉め、ノブを強く握った。内側からガチャガチャと回されるが、必死に抵抗する。

「おい、カリク！　なんでドアを閉める！」

老人が叫び声の中から聞こえてきた。こちらは努めて冷静に返す。
「うるせえよ、ジジイ。今度は父さんに何を頼まれてきたんだ」

「誰がジジイじゃアアア！」

さらに大きな声が上がった。ドアの内にいる老人は、トルマ「シエード。カリクの祖父であつた。

「だいたい、今日は話をしにきただけじゃー！」

「父さんに頼まれたのは否定しないわけな」

テンションの落差が激しいやりとりは、しばらく続いた。

トルマは、元軍人で現役を退いてからも、数年前までは軍属で、次世代の指導をしていた。カリクの父であるニツク「シエードも軍人なのだが、指導側になる前からトルマは彼に軍人としての教育を施していた。その成果なのか、ニツクは現在進行刑でエリート街道を進んでいる。

そんな祖父を、カリクは苦手にしていた。理由は、父が受けた訓練を自分もさせられたからである。時たまやってくるたびに、指導された。幼い頃は疑問も抱かずに従っていたが、成長するにつれて嫌になっていった。父のことは嫌いでなかったが、彼は軍人になる気などなかったので、祖父の指導が苦痛になったのである。ただ、数年前にカリクは“ある問題”の存在を理解したため、拒否することとはなかった。抵抗は、多少するが。

祖父との小さい戦いは、母のマリー「シエードの介入により、終了していた。結果として、

「まったく。目上をなんだと思つとるんじゃ」

カリクはトルマから小言をもらっていた。

「まあまあ、お義父さん。それくらいにしてあげてくださいな。ほら、カリクも謝った方が早いわよ」

マリーが割って入る。栗色の短髪で、背は女性の平均より低い。物腰は柔らかかった。

「悪かったよ。でも、今日は訓練はなしにしてくれ。友達との約束があるんだ」

母のフォローに乗っかり、カリクはそう訴えた。早くしないと、サリアを待たせてしまう。

「なんじゃ、用事があるのか。それを早く言え。人を待たせるのはよくないからの」

「ありがと、じいちゃん」

引き留めてたあんたには、言われたくない、と思っていたが、口には出さなかった。

「あら、お友達と遊びに行くの?」

マリーが首をひねる。

「まあ、そんなとこだな」

カリクは曖昧に答え、約束の相手がサリアであると、言わなかった。彼女のことは母と祖父もよく知っているので、変につつかれたくなかったのである。

「そう。あんまり遅くならないようにしなさいね」

「それ、高校生の男に言うか?」

「高校生でも子供は子供だもの。男の子は男の子で、危険はあるのよ」

カリクがつっこむも、マリーは涼しい顔で返した。肩をすくめる。ただの男子高校生でも首をひねる言葉ばかりか、彼には普通の高校生と違う部分がある。上の服を被せることで今は隠れているが、脇腹に“それ”はあった。強制的に祖父に持たされているものである。といっても、母は存在を知らないなので、それで反論しようとはしなかった。

「とにかく、着替えたらすぐに行くから、話は帰ってからにしてくれ」

「分かったわい。早く行ってこい」

トルマがしっしつと手を振る。カリクは肩をすくめて、自分の部屋に向かった。二階にあるため、階段を上がっていった。

カリクを見送ってから、トルマとマリーが話を始める。

「何か知りませんが、よかったですか、先に話さなくて」

口火を切ったのはマリーだった。トルマは肩をすくめてみせる。

「大丈夫じゃろ。約束を破らせるわけにもいかん。帰ってきてから、ゆっくり話す」

「そうですね。なら、いいですけど」

トルマの返答に、マリーはあっさり退いた。別の話題を始める。

「そういえばのう、ニツクの奴、首都から遠ざけられたそうじゃ」

「えっ？ どこに行かされたんですか」

寝耳に水で、マリーは目を見開いた。ニツクは、トルマの息子であり、マリーの夫である。彼は長く首都軍勤務をしていたので、マリーは他に移るとは思っていなかったのである。

「東都市のニケアじゃ。異例の若さでの少将昇進で、おまけに東軍統括じゃと。我が息子ながら、恐ろしいもんじゃ。裏がなければ、素直に喜ぶとこなんじゃがな」

トルマは、かなり引つかかる言い方をした。マリーが、眉をひそめる。

「裏があるんですか」

「あると見て、まず間違いない。首都から離されたのは、単にニツクがいると邪魔だからじゃろう。だからこそ、ニツクはわしをここによこしたんじゃ。カリクへの話も、その裏事情に関係することじやよ」

彼女の問いに、声を落として答える。軍を退役しているものの、上層部に食い込まんという地位にいる息子の存在があったので、そ

こが情報源としていた。ゆえに、かなりきな臭い情報も多く仕入れている。ニツクの異動に裏があるとの予測は、そこからきていた。

「ミッドハイムめ。昔から、危うい奴だとは思っていたが」

一人つぶやく。怒りと後悔とが、混じっていた。

声が聞こえたのだろう、マリーは何か言いかけたが、ドアの開閉と階段を駆け下りてくる足の音を聞いて、口を噤んだ。

「なんで二人して、まだ玄関にいるんだよ」

カリクである。制服から私服に着替えていた。トルマたちが、未だに帰ってきたときと同じ場所にいることに対し、首をひねっている。

「ちよつとした立ち話じゃ。それより、早く行け。友達が待ってるんじゃろ」

「言われなくても、行くつての」

トルマと軽口を叩き合ってから、

「じゃ、行ってくる」

カリクは二人の間を通り過ぎた。

「本当に早く帰るんじゃぞ」

トルマに背中から声をかけられ、

「分かってるよ」

カリクは、扉を開けながら応えた。

カリクを見送ってから、トルマがつぶやく。

「慌ただしいのお。誰に似たんじゃか」

「……それ、本気で分かりませんか」

マリーは苦笑いを浮かべた。彼女の反応に、トルマは首をかしげた。

カリクの言う“例の場所”とは、幼い頃サリアと二人で遊んでいた。

た広場だった。昔は何度も来ていたが、育つにつれてあまり一緒に遊ぶことは少なくなり、今ではまったくなくなっていた。

ただ、それがサリアに対して酷いことだという自覚はあった。彼女はある特殊な“力”を持っていたために、カリク以外の同世代には気味悪がらて近づかれなかったから、カリクがいなければ、独りになることがほとんどだった。また、彼女の両親は子供への愛情が薄く、いい親とは言い難い。ゆえに、もっとそばに在るべきだった。分かつていたのに、気恥ずかしさから避け気味になってしまっていた。彼女への用事というのは、そのことへの後悔も関係している。今更、何をしたところで埋め合わせになるとは思っていないかったが、何もせずにいることはできなかった。

広場に入ると、少し古びてしまっていたものの、今も中央にある噴水が綺麗に水しぶきを飛ばしていた。昼過ぎという時間帯のためか、いつもならたくさんいる子供たちの姿はない。昼ご飯か、昼寝かというところだろうと、カリクはあたりをつけた。

噴水の前には、既にサリアが立っていた。白のインナーに桜色の薄い上着を着ていて、下は白のロングスカートだった。遅れてしまったと思い、走って近づく。

「悪い、遅れた」

まず、謝った。サリアが邪気のない笑みを浮かべる。

「謝らなくて大丈夫だよ。私も今来たところだから」

「なら、いいけど」

さほど長時間は経っていないので、カリクは信用した。

事実カリクは、サリアの到着からさほど遅れていなかった。そうでなければ、未だに彼らをつけていた謎の男が動いていたから。直前にカリクがやってきたので、いったん止まり、二人から見て噴水を挟んで反対側に移動していた。

「それで、用事って何？」

「あー、なんていうか……」

サリアに促され、カリクは切り出そうとしたが、言い淀む。頭をかいた。幼なじみの少女は、微笑みながら言葉を待っている。

その後ろで、謎の男は携帯に連絡を受けていた。

「もしもし」

『まだ目標は確保できていないのか。できるだけ早くという指示なのは、貴様も分かってるだろう』

耳に入っただのは、固い口調の声だった。ただし、女性のものである。

「分かってるよ。でも、人がいないときでもいいんじゃないですかね。帰り道とか」

男の返事は、いかにも気だるそうだった。敬語も、わざとである。

『“お前がそれでいいならな”』

相手の女が、意味ありげな言葉を返した。

（見透かされてるか）

男はその意味を察し、舌を巻く。さらに女が続けた。

『人払いは、ノーザンが既に行っている。奴が暴走を起こさないうちに、さっさとやることをやれ』

「へいへい」

また軽口を返そうかとも考えたものの、男は指示に従うことにした。ただし、

「でも、あと三十秒待つて。今、すごいいいところだから」

すぐに動く気はなかった。

『……勝手にしろ』

呆れ声がして、電話は切れた。男は携帯をしまい、再び少年と少女に関心を向ける。

「さて、早く本題に入らないと、邪魔しちまうぞ」
一人で、つぶやいた。

一方のカリクは、なかなか本題に入れなかった。「えっと……」とか、「その……」を繰り返している。サリアはまったく急かすことなく、穏やかに微笑みながらこちらが話すのを待っていた。ただ、それが余計にカリクから余裕を奪っていたりする。

（早く、切り出さないと）

気持ちは焦るのに、言葉は喉で引っかかって出てこなかった。そうしている、水をさされた。

「サリア」ミユルフだな？」

自分たち以外の声に二人は反応し、持ち主の方を見ると、二十代くらいに見える私服姿の男が立っていた。そこで、ようやく広場に自分たちと男以外の姿が見えなくなっていることに気づく。

「誰だ、あんた」

カリクは素早くサリアを庇うように、彼女と男の間に入った。睨みつける。

（突然のことにも、冷静に対処しろ）

祖父からの教えが、頭によぎった。

「へえ、冷静だな」

彼の対応の早さに、男が感嘆を漏らす。カリクは、何も言わない。「うちの部下も、これくらい冷静だと助かるんだけどな」

いきなり、関係のないことを口にしてきたが、無視する。

（相手の言葉に惑わされるな）

これもまた、祖父の教えだった。

どうやら男は、脈絡のない話を振って、カリクに動揺を誘うつもりだったようで、頭をぼりぼりとかいた。

「ああ、これも空振りか。いい教育を受けたみたいだな。さっきのは本音だけど」

「生憎、英才教育を受けてるからな」

カリクが軽口を叩く。強気な態度だった。

「さすがに、ニックさんの息子っただけはある」

「何……！？」

しかし、続く男の発言には、動揺を見せてしまった。瞬間、男の拳が顔目掛けて飛んでくる。

「でも、こっちも仕事なんぞな」

「くっ!？」

カリクはすぐ防御のために、顔の横に腕を出した。

「ぐうつ!」

だが、拳の衝撃は予想以上だった。右手側に吹き飛ばされる。

「さあ、サリア」ミルフ。俺たちと一緒に来てくれ。素直に従えば、悪いようにはしない」

間に立っていたカリクがいなくなったため、男はサリアに近づいた。懐から、銀色の物体を出す。

「ひっ」

サリアが小さな悲鳴を上げた。男の手にあつたのは、小型のナイフだった。それを見て、横に吹き飛ばされていたカリクは、その場で即座に自分の脇腹に隠し持っているものに手を伸ばした。

「サリアに近づくな」

低く、尖った声が出た。彼の手には、黒く光る拳銃が握られていた。

「あらら、ずいぶんなもん持つてるのな。未成年の所持は認めてないはずだぜ」

「強引に持たされたんだ。捕まえるなら、家族の方だな」

「ああ、そうかい。ずいぶんとクレイジーなご家庭で育ちのようぞで」

「個人的には女の子を誘拐しようとしてる奴よりも、マシだと思うけどな」

「はっ、そりゃ違いねえな」

男が苦笑したところで、沈黙が訪れる。男はサリアに対してナイフを向け、彼にカリクは銃口を向けている。状況が膠着した。

（間違いなく、サリアが殺されることはない。怪我をさせられるくらいはあるかもしれないが、それならナイフよりいい獲物がある。

たぶん、あくまであれは脅しのためのもんだろう)

冷静に分析をする。

(つまり)

「ああ、そうか。これ、俺が危ねーじゃん」

思考を、男の言葉が遮った。そして男は、手にもっていたナイフをカリクに投げつけてきた。

「なっ!？」

腹部に向けて放たれた刃物を、彼は反射的に横へ避ける。銃口がぶれた。

(しまっ……)

その隙について、男はサリアではなく、カリクに突っ込んだ。き

た。

「実戦経験不足だ。出直してこい」

脇腹に蹴りを入れられ、続けざまに手首に強い手刀を喰らう。銃が手から滑り落ちた。最後に、裏拳を顔面にもらった。身体が宙を回り、うつ伏せに地面へ倒れる。

「がはっ……!」

息が漏れた。さらに身体へ重みがかかる。彼の上に、男が乗っていた。ナイフは複数持っていたようで、さっきのとは別のものを首に突きつけられる。

「お前に動かれる方が厄介なんだな。それに、交渉にも有利だ」

「交渉だと……」

上から被さるように聞こえてきた声に反応する。相手の狙いに気づき、カリクは顔を歪めた。

「サリア」ミユルフ。君が俺たちと来ることを拒むなら、こいつは殺す。君次第だ。どうする」

男の狙いは、サリアが従わざるをえない状況を作ることだった。カリクの首に刃が当てられ、冷たさが伝わる。

「カリク!」

サリアが叫んだ。彼女は、この状況で自分の身を一番に考えられ

る性格ではない。

「ダメだ、サリア！　すぐ逃げろ！」

カリクが、声高に叫んだところで、曲がったりはしない。胸に手を当てて、彼女は男へ訴えかけた。

「あなたに従います！　だから、カリクから離れて」

「何言ってるんだ、サリア！　俺なんて無視しろ！」

カリクが叫ぶ。それに対し、サリアは「ごめんね」と、微笑しただけで、彼の言うとおりにする様子はなかった。男は満足げに微笑んで「いい子だ」とつぶやき、携帯を取り出す。何者かへ、電話をかけた。

「もしもーし。目標確保。俺は手が放せないんで、車回して」

親しげな口調だった。カリクとサリアに、電話の声は聞こえない。「ああ、広場のまんまだ。どうせ、ノーザンも回収するんだし、ちようどいいだろ」

かすかに、電話口から相手の声が漏れ聞こえる。どうやら、女性のようにだった。

「分かってるよ。いいから、早く来てくれって。よろしくな」

男はそう言って、通話を終えた。携帯をしまう。

「さて、しばしご歓談だ。“しばらく”会えないんだから、挨拶は済ましておけよ」

それから男は、先ほどまでとは一転し、重々しい口調で言った。

「ごめんね、カリク。カリクを見捨てるなんて、私にはできないの」

先に発言したのは、サリアだった。押さえつけられたまま、カリクは声を荒げる。

「ふざけんな！　お前がこいつに従う必要なんてない！」

感情的だったが、この言葉には根拠があった。

（もし、本当に俺を殺す気があるのなら、さつさと殺してサリアを連れて行ってしまえばいい。そうしないで、わざわざ交渉を持ちかけてるのは、俺を殺すと何かしらの不都合があるからだ。だから、サリアが逃げても、俺が生き残れる可能性は大いにある）

考えはしつつも、口には出さない。言ってしまったら、男が作戦を変えるのは明白で、その中身が予想できない。なので、サリアが逃げられる今の状況を壊したくなかったのである。

「分かつてる」

唐突に、サリアが言い放つ。カリクの考えは、意味がなかった。

なぜなら、

「分かつてるけど、カリクを危険にさらしたまま私だけ逃げたりできない」

彼女は、すべて理解したうえで、動くことができていなかったからである。

「お前……っ」

その意図を察し、カリクは顔を歪める。優しさがために、目の前の少女は自分を切れないのだ。

「なるほど。ますます気に入った。精々“あがけよ”」

男の声は、どこかご機嫌だった。

そこへ、

「どんな状況だ、これは」

呆れた感じの高い声が飛び込んできた。カリクはなんとか視界の端に、声の主を捉える。

二十代くらいで、金髪をポニーテールにして頭の後ろでまとめている女性だった。分かりづらかったが、背は高めだった。顔立ちがよく、綺麗な海色の瞳が覗いている。ただ、今はじと目になっていた。

「見てのとおりだ。車はどこにあるんだ」

「すぐその通りだ。それより、説明をしる。これはなんだ」

一応、男の質問に答えてから、女は同じ問いを繰り返した。

「んー、こいつを人質にしての脅迫だな」

男はかなり軽い調子だった。女はそれで状況を把握したらしく、頭を軽く抱えた。

「……まあ、いい。その貴女、ついてこい。おとなしくしていれ

ば、悪いようにはしない」

しかし、彼女はそれ以上、状況について何も言わなかった。サリアが抵抗なくうなずく。女の方へ歩き出そうとした。その背に、カリクが叫ぶ。

「行くな、サリア！」

悲痛な呼びかけに、彼女は立ち止まった。振り返り、声は出さず口だけを動かす。

「ごめんね」

また、謝罪だった。前に向き直り、女を真っ直ぐに見据えた。

「貴女に従います」

「いい目だ。ただ、これは許せ」

女は敬意を表しながらも、サリアの後ろに回り、銃を脇腹に押し付けた。銃口の感触がしたからか、サリアは微かに表情を歪める。

「先に行く。そちらの少年は、お前がどうにかしろ」

「りょーかい」

男の返事を聞いてから、女はサリアを伴い、広場を出て行った。後に残ったのは、男二人である。

「さて、お前のことは任されちゃったわけだが、どうしたもんかね」男が楽しげに言った。対照的に、カリクは敵意を剥き出す。

「あんたが俺を離れたら、すぐに潰してやる」

「おー、怖いね。こりゃ、簡単に離せなそうだ」

あくまで男は軽い態度を変えない。

「だから、動きを封じさせてもらうな」

その言葉の後、首の後ろに衝撃が走って、カリクの意識は飛んだ。

「まったく。さすがに“あの人”の息子だけあるな。今から、将来有望なこった」

広場には、倒れ伏した少年と、二十代くらいの男性の姿がある。少年は、意識を失っていた。

「さてと、戻るか」

男を置いてきぼりに、男は仲間が乗っている車へ向かう。

車は、先ほど女が言っていたとおり、広場のすぐ近くに停められていた。迷いなく、運転席へ乗り込む。後部座席でサリアを捕縛している女から声をかけられた。

「一応、労は労っておこう。お疲れ様だ、ガヌ」

「こりゃどうも、シルラちゃん」

彼女に対し、ガヌ「ロード中尉はバックミラー越しに笑ってみせた。同じく中尉であるシルラ「マルノフスが、眉根を寄せる。

「誰がシルラちゃんだ。ここで撃ち殺されたいのか、貴様」

「いいえ、滅相もない」

ガヌは大袈裟に両手を胸の前で動かした。シルラは深いため息をつく。

「まったく、なぜ貴様のような奴の方が今回の任務の責任者なのだ。まだ犬の方がマシな頭をしているというのに」

「優秀だからじゃないですかね」

「よっぽど、風穴をあけてほしいらしいな」

「怒るなよ、シルラ。冗談なんだから。シワが増えるぞ」

「誰のせいだ」

シルラの冷たい視線と声を受けつつ、彼女の隣にいる少女へガヌは目をやった。サリア「ミユルフ。彼が上から聞いた話では、不可思議な力を持っているということだった。

「そういえば、“例の少年”はどうしたんだ？」

「ちよつと眠ってもらってきた。安心しな、なんにも怪我はしてない」

最後はサリアに向けて言った。反応に困ったのだろう、彼女は複雑な表情を浮かべただけだった。

「それを言うなら、ノーザンはどうしたんだ。さすがにあの図体が隠れられるほど、この中は広くないぞ」

今度は、ガヌからシルラに問う。

「別行動だそうだ。この車で首都に行くのは、私たち三人というこ

とになる。本当なら、今すぐ出るべきなのだが貴様は無駄話に時間を使ってしまうているわけだ」

彼女の言葉には、明らかに棘があった。しかし、ガヌは気にしない。

「そうか。じゃー、早く行くとするか」

「……いつか鉛玉をぶち込んでやる」

彼女は毒を吐いた。ガヌはやはり気に留めず、エンジンをかけた。アクセルを踏み込み、車が動き出す。

ガヌが再びサリアを見ると、窓の外をじっと見つめていた。儚げな表情で、一心に誰かを想っているようだった。

と、

『カリク、絶対に助けに来て。きつと、きつとだよ』

突然少女の声がした。サリアのものであったし、状況からして内容も特に不思議ではない。ただ、

『私、信じてるから』

彼女は“口を開いていない”。耳を介して聞こえたものではなかった。

「これは……」

「……マジもんかよ」

シルラとガヌが、それぞれ驚愕を示す。サリアはしゃべっていないはずなのに、言葉が直接、心に飛び込んできたのである。

これが、彼女の“力”だった。

「オモイノチカラ」、か」

力の名称を、シルラが口にする。彼女の方に、サリアが肩を震わせ顔を向けた。目が見開かれている。

「本来は、あの少年にだけにだけ伝えようとしたのだろうが、想いが強すぎて漏れだしたようだな」

「どうして、それを知って……」

シルラの分析に、サリアは自分の想いが漏れたことよりも、隣にいる金髪の女性がなぜ力の存在を知っているのかという疑問がよぎ

ったようだった。声に困惑と警戒が混じっている。

「上の人間から聞いたただけだ。正直、半信半疑だったかな。実際に体験しては、否定のしようがない」

「まあ、“あれ”がありなら、ありだろ」

シルラの言葉に続き、ガヌが口を挟んだ。頭には、ある人物の姿が浮かんでいた。心に浮かぶイメージは、畏怖。

「あまりトップを“あれ”呼ばわりしない方がいいぞ。聞かれて気分を悪くされても困る」

「いいだろ別に。隠してても、意味がないしな」

肩をすくめた。頭から今浮かんでいる人物を消すために、話題を変える。

「にしても、こっからまた首都まで二日か。しんどいねー」

よりによってばやきだった。今現在、最も早い移動手段である車を持つてしても、首都までは時間がかかるのである。シルラが眉をひそめた。

「仕方がないだろう。歩きでないだけ、マシだと思え。それに、交代で私も運転はするんだ。今から嘆いてどうする」

「そりゃ、そうなんだがな」

（首都に戻ってからが、戦争だからな）

後半は、思うだけで口に出さなかった。

雑談に興じる“軍人”二人と、さらわれた少女を乗せ、車は首都へと向かう。

サリアは人知れず、もう一度、幼なじみの少年を強く想った。

二章『旅立つ少年』

『カリク。助けに来てくれるよね。貴方なら、きっと……』

頭に、いや、心に、優しく悲しげな声が響いた。しかし、姿は見えない。幼なじみの少女が、どこにもいない。探そうとしても、まず身体が動かせなかった。深い暗闇の中にいながら、もがくことすらできなかった。締め付けられるような胸の苦しさから、叫ぶ。

「サリアーッ!!」

そこで夢は途切れ、カリクは地面の上で跳ね起きた。

「ああっ……?」

意識がはつきりしない中、辺りを見回す。制服姿の警察官が何人か彼のそばにいた。右手側には、噴水がある。広場だった。

（何が……）

「き、君。大丈夫か」

警官の一人が尋ねてきた。カリクは多少もってから、「はい」と、簡単に返す。

そこで、記憶が次々と雪崩のような勢いで蘇ってきた。

（そうか。俺は気絶させられて……）

唇を噛み、拳を握る。あまりに自分が情けなかった。

「どうかしたのかい。怖い顔をしているが」

「いえ、別に。それより、どうして警察の人がここにいるんですか」「何を言ってるんだ。こっちは、どうして君がいるのか不思議なくらいだよ」

警官に疑問を疑問で返され、カリクは眉をひそめた。状況を把握できていないのを察してくれたのか、警官が説明を始める。

「この広場に爆弾が仕掛けられたという情報が入ったんだ。たぶん嘘だとは思うんだが、偽物の警察官が騒ぎ立てたらしくて、大騒ぎになっててね。仕方ないから様子を見に来てみたら、君が倒れていたんだ」

「爆弾……」

すぐさまカリクは、それが人払いのためだという考えに至った。サリアを捕らえるために、わざわざ広場から人を遠ざけたのである。ただ、それだと疑問も浮かぶ。

（どうして、こんな面倒なことを）

こんな目に付きやすい場所で誘拐を決行した意味が理解できなかった。深夜を待って、サリアの家に押し入った方が、目立つリスクを減らせたはずなのである。それに、あの男女は知り得なかっただろうが、サリアの両親は、自分たちに危険が及ぶかもしれないのなら、簡単に娘を切り捨てるような人間だった。

（俺の素性を知っていたのと、何か関係が？）

となると、思い当たる理由はカリクである。男の方はなぜか、カリクを知っていた。ただ、確証はない。

「いったい、何があっただんだい？」

考えを巡らせていたところで、警官の声が入り中断させられた。

正直に話しても、無駄だと判断した彼は、

「それが、僕にもよく分からなくて。いきなり後ろから殴られて気を失ったんで、あまり覚えてないんです」

ためらいなく、嘘の話を始めた。

「後ろから殴られた？ 本当かい。犯人の顔は覚えてないか」

案の定、警官は食いついてきた。だが、嘘なので、詳細など答えられない。

「いえ、それがいきなりのこと覚えてないんです。ごめんなさい」
そう言って、うやむやにした。騒ぎの犯人は先ほどサリアを誘拐した男たちの仲間にはいないので、存在したのは間違いない。あとは、見ていないことにすればさほど厄介なことにはならないと踏んでいた。

「そうか。でも、とりあえず話だけは聞かせてもらえるかい」

「かまわないですけど」

もちろん、何も与えられる情報は持っていない。解放されるまで、

さばど時間はかからなかった。

警察での証言捏造を終え、カリクは日の暮れた道をひた走った。

警察よりも、誘拐犯の情報を持っていそうな人物に心当たりがあったのである。彼らは、車を持っていたが、徐々に普及してるとはいえ、キュールで持っている人間はまだ少なかった。複数行動で銃も所持しており、“サリア”を狙ってきたことから、普通の人間ではなく、何かしらの組織の者たちであることが予想された。

ともすれば、警察よりも“彼”の方が知っている可能性が高い。いや、そもそも今日訪ねてきた原因そのものが、この件と関係しているのではないかという予測もあった。

自宅にたどり着いたカリクは、走ってきた勢いそのままに、玄関のドアを力任せに開け、思い切り叫んだ。

「クソジジイ!!」

家全体、もしかすれば近所に届いたのではないかというくらい、強烈な音量だった。ただ、

「誰がクソジジイじゃあ!!」

負けないくらいの声が、家の中から聞こえてきた。歳を感じさせない、屈強な老人が大股歩きで奥から出てくる。その後ろから、何かと目を丸くしてマリーが顔を覗かせている。

「いったいお前は、祖父をなんだと思ってる……」

「サリアが攫われた! 知ってることをあらかた話せ!」

説教を始めようとしたトルマを遮り、カリクは再び叫んだ。瞬間、祖父と母の顔色が変わった。後者はおそらくサリアという名前に、前者は“それ以上”のことに驚いたと判断する。

「知ってるんだろ、ジジイ」

目を据え、真っ直ぐに見つめる。強い怒りと一緒に、悔しさと辛さが涙となって彼の頬を伝った。

「カリク。それは、本当か」

「嘘でこんなことは言わねえよ。いいから、情報を寄越せ」
剣幕は凄まじく、今にも祖父に飛びかかりそうだった。

「まさか、こんなに早いとは」

その祖父は、意味深な言葉とともに、顔を歪めた。

「やっぱり、事情を知ってるんだな」

カリクが詰め寄る。

「ああ、知つとる。今日はその話をしにきたんじゃからな。これほど早くに動きがあるとは思わなんだ」

一つ前の言葉と同じ内容を、もう一度繰り返す。トルマにとっても、想定外のような話だった。

「おそらく、サリアちゃんを攫ったのは、軍に関係する人間じゃ。もし違つたとしても、軍の息がかかっていると考えると問題ない」

「軍……」

祖父の話は、カリクの予測の中で最も悪いものだった。サリアを連れ去ったのは、祖父がかつて在籍し父が属する軍の関係者だといふのである。

「根拠はいくつかある。まず、サリアちゃんを狙ってきたこと。『力』の存在を知るものは、世界にほとんどいないんじや。にも関わらず知つとるとなると、それだけの諜報能力があるということになる。それから、ニツクの左遷じや。お前さんにはまだ話しとらんかったが、首都から出されてニケアにやられた。おそらく、上層部に探りを入れていたからじやろう」

「父さんが、上層部に探りを？」

初めて聞く話だった。順調に軍でエリート階段を上がっている父が、そんなことをしているとは思っていなかったのである。

「ああ。本当は、単純に国のために軍人として育てていたんじやが、サリアちゃんがこの町に来たことで状況が変わった。軍の上部からきな臭さを感じ始めたんじや」

「ちよつと待ってくれ。サリアがこの町に来たって、あいつは生ま

れたときからここで育ったんじゃないのか？」

幼ない頃からずっと一緒だった少女についてのことで、カリクは問いを口にした。トルマは、首を横に振る。

「いいや。あの子は外から来た子じゃ。二つか三つだったときにな」
初めて知る事実だった。同時に、疑問に思い至る。

「じゃあ、サリアの親も外から来たってことなのか？」

「それは違うの。今のあの子の親は、本来の親ではない。わしとニツクとマリーで頼み込んで、育ててもらったんじゃない。わしらの目の届く場所で、なおかつ完全に手元ではない位置ということだな」

「どうして、そんなこと」

「あの子の力が、それだけ希少なものだったからじゃ。わしですら、都市伝説のようなものだと思っていたからの。だから、口も開いていない女の子の感情が伝わってきたのに、かなり驚いたわい」

当時を思い出しているのか、祖父は遠い目をした。すぐに、そんな状況ではないことを思い出したようで、カリクに向き直ってくる。
「とにかく、軍内部では力の存在を信じ、悪用を考える輩も少なからずおった。だから、完全な監視下ではないものの目の届く場所においておいた訳じゃ」

「なるほどな。前に言ってた、サリアがいつか狙われるかもしれないっていうのは、そいつらのことか」

説明を聞き、カリクは理解した。彼は、サリアの“力”がいつか狙われているかもしれないというのは以前から伝えられていた。ゆえに、“サリアを護るため”という理由から、祖父の訓練に文句を言わず従事したのである。その懸念の理由は、この時点で既に、軍にあったのだ。

「そうなるの。だが、状況は今より悪い。ニツクに追わせたかぎりだと、今回の首謀者はかなりヤバいんだ」

「上層部が関わってるのか」

サリアの情報はかなり少ないはずであるので、彼女を知ることができたという時点で、容易に想像ができた。しかし、祖父の出した

名前は、一步上の人間のものであった。

「上層部どころじゃない。今回の首謀者は、おそらく“軍王”じゃ」
「なっ……」

息をのんだ。とんでもない人物を表す称号だったのである。

“軍王”。議会を持ち、総理大臣の席があるにも関わらず、事実上ラスタージ共和国の頂点に君臨する者の称号である。本来の階級名は元帥なのだが、国政も担っているためにそう呼ばれていた。数代前からの体制なので歴史は浅いが、この国の軍事色はその数代の間にかなり濃くなった。

「現在の“軍王”であるクラカルⅡエルⅡミッドハイムは、わしが一番最初に持った部下なんじゃが、“力”の存在を信じ、かなり固執しておった。頂点に上り詰めた結果として、専門の研究施設を作ったという情報もあるくらいじゃ。首謀者である可能性は、かなり高い」

トルマの口調は苦々しかった。行いそのものも気に入らないのだろうが、かつての部下を止められなかったという負い目もあるようだった。

「じゃあサリアも、その施設に？」

「ありえるの。ただ、わしの知っている奴の性格のままならば、確実に手元に置いておくはずじゃ。どの施設かはともかく、十中八九、首都に連れて行かれたとみて間違いないじゃろう」

「首都……」

カリクが噛み締めるようにつぶやく。首都セルゲンティス。軍の本部もある、強大な町である。サリアは、そこに連れて行かれた可能性が高い。考えたことは、一つだった。

「行つてやる」

「なんじゃって？」

「首都に行くんだよ。サリアを助けるために」

自分が首都に行き、サリアを取り戻す。それしかなかった。いきり立つ中、トルマが苦言を呈してくる。

「簡単に言うが、そう甘いものではないぞ。お前がいながらサリアちゃんが攫われたということは、相手はお前以上じゃ。おまけに、軍王もある。首都に行ったところで、どうにかなると思えん」

「だからって、何もしないでいられるかよ。こんな手段を取るんだ。何をされるか分かったもんじゃない。それに、軍の上層部が関わってるなら、正攻法で警察とかに訴え出ても潰されちまう。俺が自分で動くしかないだろうが」

カリクは祖父の言い分を突っぱねた。さらに言葉を重ねる。

「なにより、理屈じゃない。俺はあいつを助けたい。いや、助けないといけないんだ。理由なんて問題じゃない。じつとしてらんねえんだよ！」

心にあるのは、幼い頃に交わした約束だった。サリアを一人にしないと、彼は言い切ったのである。根底には、彼女への特別な想いがあった。それはとても単純な感情でありながら、強く激しい原動力として彼を突き動かしていた。

「確かに俺は、サリアを攫いに来た奴ら相手に、齒が立たなかった。軍王にかなうとも思えない。でも、それでサリアを諦める理由にはならない。生きてるかぎりには、何があってもあいつを諦めるわけにはいかねえんだ」

拳を握りしめた。爪が食い込むほど、強く、強く。

「だから、止めないでくれ。もし止めるなら、反抗しないといけなくなる」

目を据え、保護者二人を見た。

「止めはせんよ。さすがじゃな。それでこそ、わしの孫じゃ」

祖父からの反論は、なかった。肩をすくめながら、笑みを見せる。カリクからすると、意外な反応だった。

「お前のことじゃから、軽い気持ちではないじゃろ。なら、わざわざ止める必要はないわい。わしが手塩をかけて育てたんじゃから、自分から動いて当然じゃ」

「じいちゃん……」

話がまとまりかけていたところで、

「ちよつと、待ってくれないかな」

柔らかさの中に、しっかりとした芯を感じさせる女性の声が聞こえた。

「母さん？」

マリーだった。いつもの穏やかな表情はなく、厳しい顔つきをしている。

「二人だけで話を進めないでください。カリクは、私の息子です」
彼女もまた、強い目をしていた。

「貴方たちの言っているような危険な場所に、おいそれと行かせられません」

二人の方へ近づいてきた。カリクがトルマから指導されていたのは了解していたし、その目的とサリアの力についても知っていた。しかし、願わくば危険なことにはあつてほしくないと考えていた。こちらの会話を黙って聞き流すわけにかなかったのだろう。

「母さんの言葉でも、俺は従えないぞ」

間に入ってきた母親に対しても、カリクは睨みを利かせた。

「性急なことを言わないの。絶対に行くなどは、言いません」

彼女も負けじと強い目つきを返してくる。

「貴方がサリアちゃんのことをどれだけ想ってるかくらい、私はよく知ってます。だから、止めるのは残酷なものも分かる。けど、送り出すには条件があります」

「条件？」

「なんじゃ、その条件というのは」

カリクに続き、トルマも反応を示す。やはり、祖父はカリクを送り出す気だったのである。

「誰か、力のある人と一緒に首都に行くこと。例えば、お義父さんやニツク。せめて、そのくらい強い人がいないと、私は貴方を送り出せない」

「だったら簡単じゃないか。じいちゃんも一緒に来ればいい」

カリクはすぐさま横にいる祖父へ目を向けた。しかし、その表情は固かった。

「それは、無理じゃ」

絞り出すような声だった。明らかに、様子が先ほどまでと違う。

「既に、上にニックが探りを入れていたことがバレておる。ここが狙われんともかぎらん。ニックとの交渉に使えるからの。だが、わしがいれば多少の抑止にはなる。だから、ここから離れるわけにはいかんのじゃ」

「な……」

カリクの顔から血の気が引く。他にトルマレベルの人間となると、心当たりがなかった。父親であるニックでは、軍に属するためさらに動くのは厳しい。本格的に、母と対立しなければならなくなった。「なら、無理ですね。ニックもニケアに勤務地が移ったとはいえ、離れるわけにはいかないでしょうから」

マリーの口調は、冷たかった。カリクは突っぱねる。

「だから諦めろっていうのか。だいたい、なんでじいちゃんや父さんが一緒ならいいんだよ。軍王には、どちらにしろ届かないだろ。俺一人と変わりやしない」

つまり、一人でも行かせろということだった。どれだけ母に止められようとも、ここに留まる気はない。

「実戦経験に乏しい貴方を、一人送り出すよりはマシだわ。見込みもないし、具体的な策も計画もない。それじゃあ、首都にはやれない」

マリーも譲らない。間に立たされているトルマが、口を挟む。

「まあ、まて、マリー。こいつはまだ甘いが、わしとニックが動けないとなると、サリアちゃんを助け出しに行けるのは、現状カリクだけなんじゃ。なんとか、目をつぶってくれんか」

「ダメです。お義父さんの頼みでも、ここは譲れません。この子の母親として」

彼女は折れそうになかった。親の愛情を引き合いに出されては、

反論もしづらい。真正面から言い合っても無駄だと判断したカリクは、

「もういい！」

話を切り、自分の部屋へ向かった。母の許可が必要だとは思えなかった。

（明日の朝一で、家を出る）

決意は固かった。

少年のいなくなった玄関先で、マリーとトルマは佇んでいた。

「……どういってもりじゃ、マリー」

「どうもこうも、言ったとおりです」

「本当に、行かせないつもりか」

もう一度トルマからかけられた言葉に、今度は応えなかった。

翌日。まだ、太陽がその姿をすべて見せきらない時間にカリクはまとめた荷物を持ち玄関へ下りていった。そこには、一人分の影があった。

「……母さんか」

マリーだった。扉へ行くのを塞ぐように立っている。彼女の前でカリクは足を止め、鋭い目を向けた。

「……俺は、行くぞ」

堂々と言い放つ。迷いはなかった。

「考えは、変わらないのね」

「当たり前だ。今のサリアの親は、あいつを助けようなんて思わな
いに決まってる。学校の奴もあいつを避けてる。じいちゃんと父さ
んは動けない。そしたら、俺が助けるしかないだろ」

言いながら、心が締め付けられるのを感じていた。理由は違えど、
自分も最近サリアを避けていたのだ。そばにいてやるべきであっ

たのに、彼女を一人にってしまったのである。後悔の念は、とても振り切れない。

だから、今度はもう間違えるわけにはいかなかった。

「サリアを、一人するわけにはいかない」

わずかにうつむき、自然とこぼした。心の底からの思いが、そこにあった。

「……昔ね」

マリーが、ぼつりとつぶやいた。声からして、何かを話し出そうとしていたため、カリクは黙る。ただ、また止められたら、もう無視して家を出ようと考えていた。

「私、いじめられてたことがあるの。中学生のときかな。無視されたり、度の越したいたずらされたり、毎日苦しかった」

「母さんが？」

初めて耳にすることだった。

「ええ。中心になっていじめてきてたのは一部だけど、他のクラスメイトは見て見ぬ振りをしてた。親は私に冷たかったし、先生も厄介事になるのが嫌だったみたいで黙認していたから、私は一人で泣いてたわ」

内容とは裏腹に、彼女に辛そうな様子はない。むしろ、穏やかに笑っていた。

「でも、ある子が私を救ってくれたの。それも転校してきた初日にね。驚くくらい、真っ直ぐだった。代わりに、初日から周りを全部敵に回したんだけど、私はとっても嬉しかった。私を救ってくれる人はいないものだとかきらめてたから」

彼女が笑っているのは、いじめられた記憶自体は辛くとも、その先にある救われた記憶が強い輝きを持っているためだった。陰となるはずの記憶が、光に吞まれている。

「まあ、その転校生の子っていうのは、お父さんなのだけだね。昔は正義感の塊みたいな人だったの。なにしろ、知り合ったばかりの女の子のために、わき目もふらずに駆けずり回って、私の世界を

「変させちゃったくらいなもの」

「あの冷静な父さんが？」

カリクにとっては、信じがたいことだった。母の思い出の中にいる父の姿が、描けなかった。

「カリクには確かに意外かもね。でも、あの人は今も根っこはそういう熱い人なのよ。ただ、相手がいじめっ子から国になったから、戦い方を変えてるだけ。本当は、今すぐにも軍王さんのところに乗り込みたがってるに決まってる。それが、あの人だから」

話す母は楽しげだった。自慢しているようにも聞こえる。

「貴方はあの人そっくり。付き合い出してから、あの人にどうして私を助けてくれたのか訊いたのだけど、たぶん貴方と一緒にだもの」
「俺と？」

「『最初は可哀想と思ったから。でも、途中からはただ単純に好きだから護りたくなっただんだ』って。あなたがサリアちゃんを助けたと思う理由とおんなじでしょう？」

「それは……」

カリクは答えるのをためらった。肯定に等しい、ためらいだった。
「貴方もあの人、思ったら一直線なのよね。カリク、サリアちゃんのご両親のところは何度か乗り込んだことあるでしょう。そのことも知ってたのよ、私。止めなかったけどね」

マリーに柔らかな微笑みを向けられ、カリクは口を開いて固まった。彼女の言ったとおり、何回かサリアの両親のところへ乗り込み、「サリアを嫌うのは勝手だが、あいつの身に何かあったら、許さない」などと、何度か釘を刺したことがあるのだ。

「昨日はああ言ったけど、本当は止める気なんてなかったのよね。ただ、貴方がどれだけ本気なのかを確かめたかったの。生半可な覚悟じゃ、だめだと思ったから。でも、心配なさそうね。私の制止を振り切って、出ようとしてるんだから」

彼女はカリクの肩を掴み、目線の高さを合わせてきた。

「けど、一つだけ約束して。絶対にサリアちゃんと生きて帰ってき

なさい。サリアちゃんだけじゃだめ。あなたも帰ってくることにいい？」

彼女の願いは、その一つだった。“誰も死なないこと”。サリアを助けるために、命を投げてはいけないと言っているのだ。

「分かっている。あいつを助けても、その後も俺が護ないといけないんだ。絶対に死なない」

カリクは回答に迷わなかった。今まで避けてきてしまった時間を、埋め合わせるために、死ぬわけにはいかないと自覚していたのである。

「いい答えだわ。きつと貴方は、地力が上の人ともたくさん戦わないといけない。絶対に勝てないような状況にもなるかもしれない。それでも、死んじゃだめ。恥ずかしい逃げを選ぶことになったとしても、生き残ることが大事。それに……」

一度言葉を切り、

「貴方には、強い想いの力がある。サリアちゃんのために生きようとする意思があれば、きつと生き抜けるわ」

彼女ははつきりとした力強い口調で、カリクに告げた。肩から手を離し、すつきりとした表情を見せる。

「さあ、行つてきなさい。二人で帰ってくるために」

「ああ、行つてくるよ。サリアと一緒に帰ってくるために」

母親の目を見つめ、カリクは強い想いを込めてうなずいた。必ず生きて、サリアと帰ってくる。心に、深く刻み込んだ。

母親から目はずし、玄関へ行く。外への、大切な幼なじみの少女を助けるための旅への、扉のノブを掴む。

と、そこに男の声が飛び込んだ。

「待て、カリク」

振り返ると、そこにいたのはトルマだった。廊下を真っ直ぐにこちらへ向かって歩いてくる。カリクの前で立ち止まると、何か黒い物体を差し出してきた。

「こいつを持っていけ」

「これは……」

「お義父さん、それは……」

「わしが手入れたものじゃ。お前に合わせて改造してあるから、ぴったりくと思うぞ」

一丁の、拳銃だった。驚くマリーを横目にカリクはためらいなく受け取る。鈍い輝きを放っていた。確かに、手に馴染むように思えた。

「約束を違えるなよ、カリク」

「……ああ」

祖父にもうなずいてみせたカリクは、今度こそノブを回す。開いた扉から差し込む光に包まれながら、彼は元氣よく声を上げた。

「行ってきます！」

ここに、救出行は始まった。

三章『案内人』

キュールを後にしたカリクは、まず東の都市であるニケアを目指すことにした。目下問題となるのは、移動の手段がないことだった。車は上流階級の乗り物で、鉄道はまだ首都周辺にしかない。数年後であれば、首都と東西南北の主要四都市に路線があつたかもしれないが、まだ存在していない。必然的に、馬車か徒歩しかなかった。そんな背景があり、彼は二、三時間ほど馬車に揺られ、ニケアにたどり着いたのであつた。

東の大都市、ニケア。首都には劣るものの、東部軍の本拠地があり、大きめの建物も数多い、発展した街だった。メインの通りは石造りで横に広く、車もそれなりに目につく。また、機械や建築に使われる部品を作る企業、ひいてはその工場が多く、“産業のニケア”という通称があつた。ちなみに他の方面の都市にも特色があり、北は“観光のミリシア”、西は“食物のルクス”そして南は“貿易のレンバー”とそれぞれ呼称されている。

街の入り口で馬車から降り、中心部の東部軍基地へ伸びる灰色の大通りを見つめてから、カリクは家から持ってきたものでは足りないであろう食糧を買い足すため、買い物へと出た。

敵の目がどこにあるか分からないため、軍との接触は避けたかった。だから、父親に会う気は、なかった。

長旅向けの商品を扱う店で食糧を購入し、カリクは店先で足を止めて口元に手を当て、あることを考え出した。

（さて、こつからどうするか。やっぱり、馬車しかないのか？）

なぜ悩んでいるかといえば、真っ直ぐに首都へ向かう馬車は意外に少なく、回り道をして最終的に首都へ向かうものが多かったから

である。時間が惜しい彼としては厄介だった。かといって他の手段は今のところない。

と、身体に軽い衝撃が伝わった。軽くよろける。

「つと……」

「おつと、悪いね」

何かと思えば、同い年くらいの少年とぶつかったのであった。背丈はカリクよりも低く、体型は平均的なものだった。彼は軽く頭を下げ、その場を離れようとする。

しかし、

「ちよつと待て」

カリクは少年の腕を掴み、強引に引き止めた。

「ちよつ、なんだよ」

驚いた顔を向けられたが、“ごまかされない”。

「何か聞かないと、分からないか？ 盗人」

言い放つと、少年は目を見開き、それから微笑んだ。

「へえ、やるなあ。でも、俺っちとしては捕まるわけにいかないんだよねえ」

「なんだと？」

カリクが眉をひそめたのもつかの間、少年が銀色に鈍く光る何かを右手に持ち、カリクの腕目掛けて振るってきた。反射的に手を離す。先ほどまで腕があった空間を切り裂いたのは、小振りのナイフだった。

「やつぱり、反応いいね。でも、気づくだけじゃ駄目だぜ。じゃーな！」

周囲がナイフを見て騒然となっている中、肩を解放された隙に少年は逃げ出した。

「ちつ、待て！」

すぐさまカリクも後を追う。さすがに、街中で銃を抜くわけにはいかないため、そうするしかなかった。

これからのことを考えると、財布を取り返さないわけにはいかな

い。

「あんた、いい加減、しつこいぜー！」

「お前が足を止めたら、あきらめてやるよ！」

二人の少年は、街中で壮絶な追いかけっことを展開していた。二人ともなんてことのない様子だが、人混みの間を縫ってかなりの速度で走っているため、実際はどちらもとんでもないことをしている状態だったりする。

付かず離れずを保っていたが、スリの少年はやがて街の郊外に建つ、寂れた屋敷へと逃げ込んだ。横に広く、二人の背よりも高い門の脇に空いた穴から、敷地内へと入っていく。

（廃虚か……。奴の住処か？ それとも、罠か？）

迷いつつも、カリクはそれを振り切って同じ穴を通っていく。前に行く少年は、既に屋敷の扉を開き、建物の中へと入って行っていた。

「逃がすか！」

罠だとしても、追うのをやめるわけにはいかない。サリアを助けに首都へ行くには、どうしても必要なものなのだ。

堂々と正面から入り込むと、薄暗さと埃っぽい空気に包まれた。

二階建てで、前には上へつながる大きな階段があり、真ん中の踊り場から二つに分かれていた。上がりきったところからは左右に廊下が伸びており、何より目立つのは二階につけられている四つ並ぶ大きな窓である。また一階も左右と斜め前の左右に他の部屋へ通じているのであろう扉があった。

そして、

「ここまで招いたのは、あんたが初めてだよ。ただもんじゃないね！」

スリの少年は、二階へ続く階段の途中にある踊り場に立っていた。

仰々しく両手を開いている。

「そりやどうも。生憎、鋭才教育を受けて育ったんでね」

昨日、サリアを誘拐した男にも言った言葉を返した。不敵に笑ってみせる。

「へえ。奇遇だな。俺っちもおんなじようなもんだ」

すると、少年も同じような表情を浮かべた。ゆつくりと、獲物を手にする。銀色を放つそれは、ナイフだった。

「何本あるんだ、それ」

「さあ。とりあえず、たっくさんとだけ言っとくよ」

「ああ、そうかい。そういう認識にしておく。まあ、こっちも武器を使わせてもらうけどな」

軽い調子の少年に、肩をすくめてみせてから、カリクも銃を抜いた。余裕の表情を崩さなかった少年が、わずかに頬を引きつらせる。

「えーと、うちの国って、未成年が銃持ってよかったでしたっけ」

「そんなもん、決まってるだろ」

カリクは銃口を上へと向けた。

「もちろん、違反だ。でも、そっちもスリだから、犯罪者なのはおあいこだろ」

ためらいなく、引き金を引いた。甲高い銃声が響く。狙いは、少年の足。

「いった!」

見事に当たったが、弾は足の皮にも届くことなく、乾いた鉄の音を上げさせただけだった。

「……足にまでナイフを隠し持ってたのかよ」

「言っただろー、たっくさん持ってるって。それより、いったいんだけど。ヒリヒリする」

「それで済んで良かったな。本当なら、穴が空いてたんだ。ナイフに感謝するんだな」

言葉を交わしつつ、次に狙う場所を考える。彼は足を撃つことで、命には別状ないようにしようとしていたのだが、無理そうだった。

かといって、他にどこを狙えばいいかも分からない。

（そもそも、あいつが逃げない理由が分からない。街中でなら、騒ぎを起こせば乗じて逃げられたかもしれないのに）

「どうしたんだよ。こないなら、こっちからいくぜ」

照準を合わせかねていると、少年が高らかに宣言した。どこからともなく手品のように複数のナイフを出し、指の間に挟んで構える。

「おらっ！」

その中の二本を、的確にカリク目掛けて飛ばしてきた。階段下にいたカリクは、横にステップを踏んで避ける。

が、

「あめえ！」

「なっ！？」

そこにもナイフが飛んできた。脇腹を捉えている。

「くそっ！」

仕方なく、銃で対処する。銀の物体を弾いた。床にちょうど刃先が刺さる。

「へえー。やっぱりやるねー」

「お前がそれを言うかよ。ただのスリにしては、レベルが高すぎるぞ」

楽しそうに見下ろしてくる少年に、カリクは吐き捨てるような口調を向けた。

（俺が避ける方向を読んでたんだろうな。まさか避けたところにも放っているとは思わなかった）

実際のところ、相対している少年は、あまりに手慣れすぎていた。銃を持った相手にそれほど尻込みもしていないのも、ただの孤児とは思えない。何かしらの訓練を受けたことがあると考えるのが自然だった。

「でも、いつまで保つか？　どんどん行くぞ！」

第二陣が放たれる。たった一本だが、避けた先にもくるのは予想がついた。

「ちい！」

手の内を理解しつつも、まずは“見せ”であるナイフを左に避ける。次に来るであろう攻撃を予測し、横へ銃口を向けた。しかし、予想外の光景が、彼の目に飛び込む。

「三本！？」

向かってくるナイフが三本に増えていた。縦に列をなすように並んでいる。とても、拳銃一丁で対応しきれない。とりあえず、一番上にある肩口を狙ったものを撃ち落とす。他二つはどうしようもなく、身体に受けた。

「ぐうつ……」

呻き声が漏れる。脇腹は隠して巻いている銃のホルスターで、ダメージを軽減させたが、右足の膝辺りに深く刺さった。ズボンに血が滲む。

「悪いなー。俺っちってば、ちょっと訳ありな人間だから、ここまですっかり顔を覚えられると、厳しいんだ。だから、不本意だけどあんたには死んでもらわないと困るわけ」

カリクヘダメージを与えたのを見て取ったからか、少年が口を動かす。どうやら、姿を覚えられては不都合な事情があるようだった。「そうかよ。そりやまた、運がないな」

痛みを堪えながら、脇腹のナイフを引き抜く。足のは、出血が酷くなるのが目に見えていたので、刺さったままにせざるをえなかった。

（どうする。獲物がナイフだから、あつちは確実にトドメが指せるくらいにこつちが動けなるまで、この戦法でいくつもりだろうしな）少年の方を睨みながら、カリクは頭を回転させる。こんなところで死ぬわけにはいかない。かといって、財布を諦めるわけにもいかなかった。それに、目の前の少年はただ者ではない。場合によっては、戦力にできそうだった。

（このまま、同じことを繰り返してもギリ貧になるだけだ。武器切れを待つわけにもいかない）

「言っておくけど、逃げられはしないぜ。背中を見せたら、そこであんたは終わりだ」

手元でナイフを弄びながら、少年は微笑を浮かべる。元から引く気のないカリクには、ちつとも役に立たない警告だった。

（仕方ないな……）

カリクは、腹を決めた。肩から提げたカバンを、左手で掴む。

「さあ、またいくぜ！」

三度ナイフが飛ばされる。今度は、避けずに自分目掛けてきたのを真っ先に撃ち落とした。

「甘いね。あんたも、その程度か」

少年が冷たい声を出す。奥にもう何本か別のナイフがあつたのである。先ほどと同じく、縦に三本並んでいる。さらには、左右にも一本ずつ放たれていた。

（きた！）

しかし、“計算通り”だった。まず正面の一番上を飛ぶナイフを右手に持つ銃で撃ち落とす。残るは二本。

「よっ！」

声とともに、カリクは前へ飛び、身体の前にカバンを回した。下のナイフは飛び越し、彼の腹部を捉えていたナイフはカバンに刺さる。

「なっ！？」

カリクが銃だったからだろう、突っ込んでくるとは思っていなかったように、少年は目を見開いて驚きを示した。ほんの僅かな間ながら、動きが止まる。それでも、カリクには充分だった。階段を一気に駆け上がる。

少年が我に返り、迫るカリクへ攻撃を仕掛ける。両手から一気に四本を横に列を作って放ってきたが、

「甘い。狙ってる軌道が見えすぎだ」

動揺している相手の攻撃を見切るのは、造作もなかった。真ん中二本の間に身体を通す。そのままの勢いで、間合いを詰めた。

「くそっ！」

少年が連続で何本か放ってきたが、カリクは神がかったスピードで、自分の進むルートのものをすべて銃弾で床に落とした。それも段を上りながらである。

少年の手元には、ナイフがなかった。後退しつつ、武器を取ろうとしていたが、

「ずいぶんと余裕なさそうだな」

カリクはその隙を逃さない。最後の一詰めをする。

「終わりだ」

そして彼は、引き金を引いた。ただし狙いは、少年の身体ではない。銃口は、相手の靴を捉えていた。

「おわっ!？」

けたたましい金属音が響き渡る。“刃物を仕込んだ靴”で蹴りを入れようと、足を上げていた少年は、銃弾を受けた衝撃で、背中から床に倒れた。容赦なくカリクは敵の腹を踏みつけ、銃を向ける。

「チェックメイトだ。全身にナイフを仕込んでるお前なら、靴にも何かあると思ってたぜ。残念だったな」

少年を見下ろしながら、カリクは表情を崩さずに告げた。全身に武器が隠されているのなら、追い詰めたとき一番注意が疎かになりやすい足の方にもあると考えたのである。予想通りだった。

「ぐっふ。や、やっぱり、ただもんじゃないな、あんた」

足蹴にされながらも、少年は笑ってみせた。抵抗しないことを示すため、手を上げている。笑みは硬い。

「とりあえず、まず財布の場所を言え。話はそれからだ」

「わ、分かったよ。ケツのポケットだから、このまんまじゃ取れないぜ」

「そうかよ。じゃあ、やっぱり順番を変える」

「いつ？」

少年の頬が、さらに引きつる。

「どうしたよ。足をどかした瞬間に何かするつもりだったか。それ

ともポケットに何か仕掛けでもしてたか」

「い、いやいや。滅相もない」

（絶対になんかあったな……）

まだ油断できない相手であることを再認識する。ただ、だからこそしたい話があった。

「俺は今、首都に向かつてる。軍の上層部と戦わないといけない。お前も一緒に戦ってくれ」

「はあ？ いきなりなに言ってるんだ」

少年が素っ頓狂な声を上げた。無視して、続ける。

「お前も訳ありなんだろ。警察の世話になりたくなければ、協力してくれ。安物でよければ、食事もちっちで持つてやる」

とても協力を頼んでいる光景ではなかった。少年も、口を空けて固まっている。

「早く答えろ、こそ泥」

眼下にある腹を、さらに強く踏みつけた。少年が呻きを漏らす。たまらず、うなずいた。

「わ、分かった分かった。でも、一個だけ条件」

「聞くだけ聞いてやる」

「なんで軍のお偉いさん方を敵に回すことになったのかぐらいは、教えてくれない？」

真つ当な質問だった。カリクはしばらく考えて、

「それくらいならいいだろう。事情は知ってもらっておいた方がいいしな」

そう言うってから、今の自分の状況について話し始めた。

「オモイノチカラ」……」

カリクが話し終えたところで、少年が真つ先に口にしたのは、その単語だった。

「ああ。軍の奴はその力を狙って、サリアを誘拐した。俺からしたら、なんの得があるのか分からないが、間違いなくろくでもないことに決まってる」

たった一点を除いて、普通の少女であるサリアが、どうして陰謀に巻き込まれたのかということと、彼女を連れて行かせてしまった自分の不甲斐なさへの怒りで、荒っぽく吐き捨てた。

一方の少年はといえば、どこか上の空だった。手は挙げたままだが、カリクに意識が向いていなかった。

「で、協力はするのか？」

話しかけると同時に軽く足へ力を入れ、強引に気を戻させる。少年は、やや顔を歪めてから応じてきた。

「にわかには、あんたの彼女が持つてるっていう力が信じられないけど、軍を敵にしているっていうなら、俺っちと一緒にだ。いいぜ、協力しても。タダでご飯も食べさせてくれるんだろ？」

今度は、ニヤリと笑ってみせる。コロコロと表情が変わる少年を見て、今更になって不思議な奴だとカリクは思った。

「ああ。それは約束してやる。ただし、財布は返せよ」

「へいへい」

銃口を少年から離す。妙な動きをすればすぐに撃てるように、警戒は怠らないがなんとなくもう攻撃はされない気がした。手を挙げることがなくなった少年が、お尻のポケットからカリクの財布を素直に取り出す。

「ほら、財布」

カリクに投げてきた。気を引かせて攻撃かとも思い、警戒したが、何もしてこなかった。

「中身だけないとかいうことはないよな」

銃を持っていない左手で、受け取る。少年は右手を自身の胸の前で振った。

「ないない」

「そうか」

「あ、でもやつぱ確認はするんだ」

カリクは少年のツツコミを無視して、中身を確認する。どうやら、何も盗られていないようだった。

「しっかし、本当に強いよなあんだ。いったいどんな教育受けてきたんだよ」

「その言葉は、そっくりそのまま、お前に返してやる。ただの家なし子にしては、戦い慣れしすぎだ」

「それもそうだな。まあ、ちょっと特殊な育ちをしたからね、俺たちは」

「特殊な育ち方、な。俺も特殊といえば、特殊か」

それどころか、はつきり普通ではない。しかし、少年はそんなカリク以上に、何かがありそうな雰囲気であった。

「そういえば、あんた名前は？」

「カリクだ。お前は？」

「俺たちはレイン。よろしく頼むぜ、カリク。主に食費を」

「安物でよければな」

「問題なしだ。食えるってだけでも万々歳だし」

互いの紹介をし、無表情に近いカリクに対して、スリの少年ことレインは笑顔を見せた。

「けど、驚いたねー。まさか、自分の財布をスった奴に協力を頼んでくるとは」

「相手がデカいからな。なんのしがらみのなさそうな、お前みたいな奴の方が味方として都合がいい。それに……」

銃を服の中に隠れているホルスターへしまう。言葉を切ったので、レインが続きを促してくる。

「それに？」

「お前の戦い方は、ほとんど我流だが、根底に軍人の基礎を思わせるものを感じた。だから、何か因縁でもあるかと思ってな。そつちのしがらみなら、あっても困らない」

「……なるほどね」

彼はどこか意味ありげな反応だった。おそらく、どこかしらは合っているのだらうと、カリクは踏む。

「じゃあ、行くぞ。これから、首都に行く手段を考えないと。誰かさんのせいで、余計な時間をくったからな」

とはいえ、協力してもらえらるならレインの事情に興味はなかった。さつさと廃屋を後にしようとする。

「えっ、ちよっ、もつと訊くことないの？」

「ない。それより時間が惜しいんだ。お前の詳細はどうでもいい」
「……さいで」

一度、レインはカリクを呼び止めてきたが、肩をすくめただけだった。

「でも、荷物を用意する時間はくれよー。さすがに準備くらいはさせてくれるだろ？」

「……逃げるなよ？」

「逃げないって。あんたの話、“面白かった”しな」

話とはかくとして、彼は旅の準備をしに、二階の奥へと走っていった。カリクは、踊り場で待つことにした。

五分ほどで、レインは戻ってきた。小さなリュックを背負っている。

「何入ってるんだ、それ」

「んー、だいたいナイフ」

「……そうか」

訊いておいていながらというところではあるが、彼は軽く流した。頭の中で、荷物確認は絶対に避けると、注意事項を書き入れる。元々、銃のせいで身体検査がアウトなのだが、比較的行われやすい手荷物の方もまずいとなると、色々と気を使わないといけなそうだった。

「んじゃ行こうぜー。ああ、俺っちの加入祝いでもいいぞ」

「それはない」

「即答!？」

レインの軽口を一刀両断し、カリクは廃屋を出た。謎の少年を、協力者に引き込んで。

それから二人は、まず古着屋へ行き、レインの服装を安物で整えた。家なし子にしてはまだ綺麗な身なりだったが、やはり普通よりは汚れていたので、違和感を消すにはそれが一番手っ取り早かったのである。結局、上は赤と黄色の派手なチェック柄のワイシャツ、下は膝や腰の部分に余裕のある迷彩柄の長ズボンという出で立ちになった。選んだのはレイン本人である。できるだけ目立ちたくないカリクは反対したのだが、

「片方が目立つてれば、もう片方はあんまり覚えられないぜ！」
という、本当かどうか際どい意見を盾に押し通された。

店を出て、街の中央付近にある役所へ向かう。キョールに出入りする馬車の情報を扱っている、交通局というところに用があった。その道すがら、カリクはレインの格好に対する周りの反応を見ていたのだが、意外にもあまり注意を引いていなかった。それどころか、上下がピンクと淡い青とか、たまにもっとんでもない格好の人がいたりで、あまりレインが派手に思えなくなってくるほどだった。

「今は、派手なのが主流なのか？」

「主流ではないと思うぜ。でも、前より増えてる。くそー、なんか負けた気分だ」

勝っていいことがあるのかとカリクは疑問に思ったが、伝えなかった。

そうこうしているうちに、役所にたどり着いた。二階建てながら、縦横の面積が大きい建物で、くすんだ白の外壁のあちこちに窓がある。だが、隣にある黒一色の建物の存在感に圧倒されていた。四階建ての建物に、演習場まで敷地内にある東部軍基地と並んでいたの

である。

「レイン、交通局の場所は分かるか？」

「知らねー。だいたい、俺っちが役所に用があるわけないんだから、分かんないに決まってるじゃん」

「……どつかに案内図くらいはあるだろ」

ただ、今は基地に用はない。とりあえず、役所の中へと入った。

中は、混んでいるわけでもなく、空いているわけでもなく、そこに人がいた。さすがに、レインの姿が浮く。隣を歩く彼へ、

「やっぱり、買い替えないか、それ」

そんな提案を試みるが、

「えー？ パスで」

あっさり断られ、カリクは肩をすくめた。

「おっ、ほらあつたぜ、カリク」

カリクに構わず、レインは楽しげに右前を指差した。その先には、“運行情報”と書かれた掲示板があり、近日中の馬車の運行情報が記された紙が所狭しと張られている。

「なんだ、首都行きはたくさんあるじゃん。よりどりみどりだぜ？」

何が楽しいのか、レインはニコニコしていた。カリクは自分の額を押さえる。

「そりゃ、首都に行くのはたくさんあるだろうよ。問題なのは、遠回りなのがほとんどだってことだ」

「遠回り？ おっ、本当だ。レンバー経由とかもあんのか。すげーな」

もう一度掲示板を確認したレインが、驚きを示した。それから、カリクの方を向いてくる。

「遠回りじゃ、ダメなのか」

「できれば避けたい。一刻も早く行きたいんだ」

首を横に振り、真っ直ぐにレインへ目を合わせる。すると、眼前の派手な少年はニヤリとした。

「じゃあ、俺っちにいい案があんぜー」

瞬時に、カリクの頭の中で警報が鳴った。

「ここだぜ、カリク君」

「ああ、そう……」

二人がいるのは、ニケアの郊外だった。眼前には、多くの産業廃棄物が山となっている。産業で発展している街の、裏の姿だった。オイルとサビの混じった悪臭が漂っている。

レインが胸を張って解説を始める。

「たまーに、失敗作の車が、解体されて必要な部品だけ抜き取られた状態で放棄されてるんだ。で、車からは抜き取られたパーツも、別のときにまだ使えるのに放り出されてたりするんだ。実際、前に見たし」

ようするに、車を見つけようということだった。カリクは難色を示したが、もし馬車を選ぶなら一日の猶予があったため、あまり期待を持たずに探しに来た次第である。

「見たことがある、か。仮に本当に車とそれに必要な部品があったとしても、動かないと意味ないぞ」

「大丈夫大丈夫！そこは俺っちにまっかせなさい」

どこから来るものなのかさっぱりだが、レインはやけに自信満々だった。逆に、カリクは不安がじわじわと増していく。

「まあ、とにかくまずは探すでしょうぜ。話はそれからだ」

「はあ……。そうだな。とにかく、探してみるか」

ため息をつきつつも、カリクは同意した。二人で、ゴミ山の散策を始める。

「で、ずいぶん俺たちは神様に愛されてるらしいな」

数十分後、カリクとレインの前には、廃棄された試作車があった。白いボディの小型車で、ボンネットは全開にされている。レイン曰わく、部品がいくつか抜かれているものの、足りないものもうまいこと調達できたとのことだった。

「いやー、まさかこんなふうにまく行くとはなー」

レインにとつても予想外だったらしい。ご機嫌に声を上げた。

「で、組み立てはどうすんだ？ 俺は車の作り方なんて分からないぞ」

そんな彼へ水を差すように、カリクは尋ねた。しかし、レインは元気なままで、こともなげに答えを言う。

「もち、俺っちがやるぜ。あと、運転もまっかせなさい！」

「仕方ない。馬車にするか……」

「待った待った！ 俺っちのこと信用してなさすぎだろ！ 共闘するんだから、仲良くしようぜ」

とは言われても、そもそもは財布をすってきた相手である。戦力としては信用できても、他の部分では無条件で信頼はできない。

「むむむ。見てろよ。俺っちの技術はすごいんだからな」

カリクの内心が伝わったのか、レインは覚悟しろと言わんばかりに、左手を腰に当て、右手で指を指してきた。

「期待しないで待っててやる。馬車が出る明日の昼まではな」

「うっしやあ！ 目にももの見せてやるからなー！」

冷たい反応にもめげずに、彼は両手を上げて雄叫びを發した。それを見て、カリクは肩をすくめる。

「まあ、せいぜい頑張れ。俺は場所を確保して、眠らせてもらう」

「おう！ って、ええっ！？ そこ、そばで待ってくれるとかじゃないの！？」

「誰が待つか。一人でやってろ」

「っ、冷てえ……」

その後も文句を垂れ続けるレインを完全に無視し、寢床探しに廃棄物の山を離れた。

翌朝、日が出掛かっているぐらいに、カリクはレインの様子を見に行った。昨日別れた場所に着くと、周囲に転がっていた部品が消えていて、ボンネットの閉められた車のそばで、昨日出会った少年がタイヤ辺りに背を預けて眠っていた。

「これは……」

半信半疑ながら、車へ近づく。見ただけでは動くかどうか分からないかったので、

「起きろ」

「ぶふっ!？」

傍らで目を閉じているレインの頬を叩く。足で蹴ろうかとも思ったのだが、さすがにやめておいた。

「車の修理はできたのか？」

「うー……。もう少し、愛情ある起こし方がよかったぜ……」

「叶わない願いを口にする暇があったら、さっさと訊いてることに答えろ」

なで声を簡単に流し、カリクは先を促した。不満げに口を尖らせながら、レインが答える。

「できてるよ。もう試運転もしたし」

「……本当か？」

「本当だよ！ 見てろよー！」

寝起きとは思えないほどに、元気のいい反応が返ってきた。そのままの勢いで、彼は車に乗り込む。カリクは少し車から離れた。

そして、窓越しに見えている少年がハンドルを掴み、足元を一度見た。

「へえ……」

ほどなく、タイヤがゆっくりと転がりだした。車が、動いていた。少しだけ進んですぐに止まり、レインが鼻息荒く降りてくる。

「どうよ、カリク君！　しっかり直してみせたぜ！」

「そうだな。文句なしだ」

素直に彼の手腕を認めた。ますます何者なのか怪しんでもおかしくないところだが、あくまでカリクは氣にとめない。いくつか、車に関する質問をする。

「で、運転もできるんだよな」

「もち！　でなきゃ、こんな提案しないって」

「じゃあ、燃料はどうするんだ？」

「そりやお前、決まってるだろ。俺っちたちが買えるわけないんだから、方々からちよつと拝借すんのだ」

二つ目への答えに、カリクはため息をついた。正直、どうせそんなことだろうという予想は持っていたのだが、実際にうなずかれると、頭を悩まさざるをえなかった。

「まあ、他に方法がないから、仕方ないことではあるんだけどな」

手を額に当てながら、つぶやくように言う。車の免許を取れるのが十八歳から、それも今は上流階級の人間でないとそうそう取得者がいないのだ。バカ正直にガソリンを買いに行ったところで、売ってもらえるわけがなかった。

「なーに。俺っちたちがちこつと盗んだくらいで、不利益になったりしないって。捕まらなきゃいいだけだし」

さもたいしたことではないかのような言い草だったが、時間の惜しいカリクとしては一度たりとも捕まるわけにはいかないため、かなり重大なことである。少しずつ遅くなるだけでも、サリアの安否は確実に怪しくなっていくのだ。また、なにより捕まらなければいだけというのが、そもそも一番大変な点なのである。

とはいえ、同じく時間を考えると、ガソリンを盗難するリスクを加えてなお、車で移動した方が効率的だった。腹を決める。

「仕方ないな。俺も盗人になってやる。お前も、捕まるなよ」

犯罪を犯さないことよりも、サリアを助けられるかどうかの方が、彼には重要だった。

「合点！」

レインが明るく返す。顔には満面の笑みがあつた。

こうして二人は、薄汚れた白の小型車に乗り、ニケアを後にした。首都へとたどり着くために。

四章『囚われの少女』

時は、カリクとレインがニケアを出て数時間経ったくらいであった。場所は移って首都セルゲンティス。サリアは、茶髪の大柄な男と金髪のスラッとした体型の女、二人の軍人に連れられて、街への入り口へとたどり着いていた。ひたすらに高く白い壁が続いて、中には監獄があると言われても納得してしまいそうだった。その中に、街へと続く二枚並びの門はあった。

今、車は止められている。セルゲンティスは、さながら国境のごとく、入る者への厳しい審査があった。軍人であっても免れることはできない。

「これはこれは、ガヌ中尉。ご苦勞様です」

サリアたちの乗る車を止めた入都管理局の人間が、降り出たガヌに敬礼をする。シルラは、サリアの隣に座ったままだった。

「まさか、逢い引き中だったのですか？」

「逢いび……っ！」

その管理局の男は、車の扉越しにシルラの姿を見つけたらしく、ニヤツとした。サリアの隣に座ったままの彼女が顔を引きつらせる。一方、車外で直接言葉を受けたガヌはというと、

「いやー、そうだったらよかったんだけど、残念ながら任務だ。それも超特殊オーダー。ほれ」

軽い調子で流し、一枚の紙を示した。サリアからだど、よく見えない。

「これは、軍王様の勅命書じゃないですか。どんな任務なんですか？」

管理局の男は、やや声色を高くした。どうやら、紙は勅命書のようだった。

「バーカ。こんな紙がもらえるくらいだ。極秘に決まってるだろ。いいから、早く入都許可出せ。車の中にいるもう一人も任務がらみ

だから確認は不要だ」

「了解しました。今、門を開けますから、車内で待っていてください」

ガヌの催促を受け、管理局の男は門の横に引っ付いている守衛室へと小走りで戻っていった。やがて、門が開く。開き切ったのを確認してから、ガヌが運転席へ戻ってきた。

「さ、行こうぜ、シルラ」

「……ああ、そうだな。行くとしよう」

サリアから見たかぎり、シルラはもう平時の調子を取り戻したように思えたが、

「あつれー？ シルラちゃん、もしかして逢い引き発言、まだ気にしてる？」

「なっ！ そんなわけないだろう、この阿呆が！」

からかいに対して、声を高くしたことから察するに、それは勘違いのようだった。

（仲いいなー）

攫われたにしては、かなり危機感に欠けた感想が、サリアの頭には浮かんた。

当初こそ、サリアは当然ながら自分を強引にカリクから引き離れた軍人二人を警戒していた。しかし、どうにもガヌとシルラを、完全に敵と位置付けることができなかった。理由は、大きく分けて二つある。

一つ目は、二人がサリアをいたわってくることだった。任務上そうしなければならないのか、それとも単純に二人の人柄なのか、首都へと向かっていった二日間、ことある事に気を使われたのである。「何か食べたいものある？」とか、「しんどくない？」とか、「もしあの男に変なことをされたら、すぐに言え。容赦なく撃ち殺す」

などと言われたのだ。

二つ目は、彼らの会話だった。一例を挙げると、

「なあ、シルラー。首都まで、あとどんくらいだー？」

「それはさつき話題にしたばかりだろうが。あと一日は絶対にかかるよ、何度も言っている」

「遠いなー。なんかこう、ワープとかできない？」

「そんな便利な能力があれば、とっくに使っている。貴様是我慢が足らなすぎだ」

「えー？　すぐに銃口を向けてくるどつかの凶暴女よりはマシだろ」

「さて、誰のこと言っているのかさっぱりだ」

「いや、現在進行中で俺に銃口向けてる方がいらっしやるじゃないですか。やめようぜー。今はお前が運転なんだから、ちゃんと前見ようって」

「……貴様から注意を受けようとは、私も堕ちたものだな」

こんな感じだった。サリアがいるにも関わらず、二人はかなりリラックスした様子で、コミカルな会話を幾度も交わしていたのである。そこから感じる彼らの人柄の印象がよかったので、一つ目の訳と合わせ、どうしても敵視できなかった。

入都の門をくぐり、セルゲンティスへと入る。中で一番に目に入ったのは、中央に位置する本部基地だった。大通りの先に位置し、圧倒的な威圧感と存在感を放つ、黒の建物だった。何階建てかは、遠くて分からない。

街並みに注意を移すと、こちらもすごかった。入り口付近こそ、二ヶアとさほど変わりない風景だったが、大通りを進むにつれて、建物の大きさが増していった。おまけに、かなり煌びやかである。ただし、どれだけ華やかだろうと、この街を囲う高い壁と併せて見てしまうと、違和感が拭えない。逆に、無機質か荘厳な感じの建物

は、とても自然に溶け込んでいる。

「相変わらず、なーんかちぐはぐした街だよなあ」

「そうだな。私としては、ジャラジャラ飾ったものがなければ、もう少しマシな気分になるのかな」

「あー、まあシルラさんはお堅いですからねー。でも、あの壁は嫌だと思わない？」

「あれは仕方ないだろう。何十年もかけて造った、我が国の絶対的な防御壁だ。防衛という観点から見て、あれをなくすわけにはいかん。好きか嫌いかわかると問われれば、後者だな」

おそらくここに住まいを持つ二人でも、この街の景観には否定的なようだった。

そんな街の中を、三人が乗った車は進んでいく。

やがて、遠くに見えていた黒の建物の真下へとたどり着いた。首都軍の基地、すなわちこの国の中枢へと。

「あー、憂鬱だな。あの人とまた会うのか」

「文句を言うな。特殊任務なのだから、当然だ。それに、閣下を慕っている人間は多い。あまり滅多な口をきかない方がいいぞ」

「分かっているよ。だから、今のうちに言っているんだ」

基地の門でまた勅命書を見せ、建物の横にある駐車場を目指した。サリアは窓から外を覗いてみたが、左側にはひたすら黒壁の建物、右側には灰色の壁が続くだけだった。しばらくしてから左折したところで、ようやく前に軍の車両が所狭しと並べられている空間が見えた。奥には演習場の類いと思しきものがある。

駐車場にガ又は車を止めた。一番始めに降りると、後方のドアを開け、

「どうぞ、お二人」

執事のように恭しく頭を下げた。気障っぽい動作だった。

「……サリア。貴女を今から軍王のところへ連れて行く。申し訳ないが、身体検査を受けた後、目隠しをしてもらうことになる」

そちらを無視し、シルラはサリアにそう説明をした。

「……別にかまいません」

サリアは素直に従う。ここで抗う意味がないし、二人をあまり困らせたいとも思わなかった。

「ありがとう」

了解を受け、シルラは礼を口にした。

「……いいから、早く降りようぜ」

置いてきぼりのガヌが、ぼそりとつぶやいた。

身体検査を終えたサリアは、目隠しをされ、シルラに手を引かれてどこか分らないところを歩いていった。ところどころから、「なんだ、あの子?」「さあ?」というような囁きが聞こえる。軍人ばかりの場所を目隠しをされた少女が歩いているため、浮いているらしい。

建物のどの辺りかさっぱり分からなくなってからしばらくしたくらいに、シルラの歩みが止まった。彼女から声をかけられる。

「止まって」

緊張が含まれていた。どことなく、張り詰めた空気も感じる。そんな中で、シルラが大きな深呼吸をした。

「よし」

と、意を決したような言葉を小声で出したところで、ノックの音がした。

「ガヌⅡロード中尉です。シルラⅡマルノルフ中尉もおります。件の少女をお連れしました」

シルラは、何もしていない。ノックをしたのも、言葉を発したのも、ガヌだった。ただし、相変わらずどこかだるそうであった。

「どうぞ、お入りなさい」

男性の声が聞こえた。聞こえ方から察するに、部屋か何かがあるのか、その中からのようだった。

「貴様……」

「ほらー、シルラちゃん、嫌そうだったから。それより、さっさと入ろうぜ」

驚きを見せるシルラに、ガ又は軽い調子で返し、

「失礼します」

彼女の返答を待たずに、どこかの部屋へ入る扉を開けた。

「……まったく」

呆れたような声を出したシルラに手を引かれ、サリアも室内へ入る。

「一旦、目隠しをとるぞ」

そう呼びかけられ、ようやくサリアは視界が戻った。明かりが眩しく感じる。

徐々に慣れてきた目で、部屋の中の様子を確認した。“たった一人”のためにあてがわれているにしてはかなり大きく、サリアの身近なもので表現するなら、学校の教室を二つくつつけたくらいの広さがある。床には赤の絨毯が敷かれていて、壁は白い。右側にはおそらく電報を打つのであろう機械が机の上に置いてあった。また、多くの人間の顔写真が上の方に飾られている。逆側には本棚と、なぜワインの入れてある棚があった。この部屋の主のものだろうか。トロフィーが無造作に乗っけられている。部屋の奥の方には軍旗、国旗が並び、ガラスの入った小型のケースも置かれていた。額縁に収められた賞状が、その頭上にある。

そして、

「ご苦労様です。ガ又中尉、シルラ中尉」

中央から奥よりにある大きな机には、白髪が多い老人の姿があった。柔和な笑顔に反し、醸し出す雰囲気は厳かで緊張感がある。何か、得体の知れない恐怖を、サリアの身体は感じとっていた。

「その子が、“オモイノチカラ”を持つ少女ですか」

細い目が捉えてくる。サリアは、なぜか背筋に冷たさを覚えた。
(なんだろう。この人、なんだかすごく嫌な感じがする)

そう“心の内”で思ったのだが、

「すごく嫌な感じがしますか。申し訳ないですね。なにしろ、命のやり取りを何度もしていると、どうしても知らず知らずに対面している相手に重圧を感じさせてしまうんですよ」

目の前の老人は、それを読み取った。サリアの表情が硬くなる。

（どうして、私の考えてることが分かるの？）

「人の考えてることは、すぐに分かるんです、私は」

またしても考えていたことを、口に出される。

（まさか……）

「ええ。そのまさかです。貴女と毛色は違いますが、私も“オモイノチカラ”を持っているんですよ。サリア「ミルフさん」

サリアの予感当たっていた。目の前にいる老人も、特殊な能力を持っているのだ。

「おっと。まだ名乗っていませんでしたね。私はクラカル「エル」ミッドハイムといいます。階級は総督ですが、“軍王”と言った方が分かりやすいでしょう」

「“軍王”……」

ラストージ共和国の頂点に君臨する者の称号を、サリアは繰り返す。目の前にいる人間がまさに、当人であるミッドハイムだった。

「ええ。驚かれたでしょう。国のトップが私のような老人で」

彼は自分に関してそう言ったが、ただの謙遜にしか思えなかった。素人目にも、隙がない。

「……そんな方が、私になんの用ですか」

サリアは明らかな警戒を表に出した。しわを寄せて、睨む。

「警戒されていますね。当然ですが、残念なところです」

言葉と裏腹に、老軍人の様子に特別残念な感じはない。

「まあ、本当は貴女が私をどう思おうと、問題はないんですが」

自分で言ったことを、あっさりひっくり返す。サリアの考えていることに、深い興味はないらしかった。

「重要なのは、あくまで貴女の持つ“力”。大変でしたよ。少ない

情報から、力についての予測を立て、その持ち主の居場所を把握するのは」

柔和な笑みを崩さないまま、軍王が告げてくる。

「つまり、用があるのは、貴女ではなく、貴女的能力です」

一個人をまるで無視した言葉だった。彼にとってサリアは、ただ単に力の所有者なのだ。

「貴女のオモイノチカラは、私のものと違って、特殊な部分がありますからね。じっくり研究させてもらいますよ。今日はただの顔合わせです。貴女の心の内から、力を持っていることは確信が持てましたし、もう退出していただいてかまいませんよ。地下の特別室に連れて行ってください、ガヌ中尉、シルラ中尉」

「了解です」

「はい」

まだ笑みの裏にある表情を見せることなく、ミッドハイムは退室を命令した。部下二人が返事する。

「行くぞ、サリア」

シルラに手を再び掴まれた。彼女は逆の手で目隠しを出す。サリ

アの視界は、再び真っ暗になった。

「待ちなさい。シルラ中尉」

「はっ。なんでしょうか」

そのまま部屋を出ようかというところで、ミッドハイムがシルラを呼び止めた。

「疑問を持つというのは、人として当然のことですが、中には持つてはいけない疑問というのがあります。なにより、遥かに上の階級の者がやることに逆らってはいけないものです」

「……はい」

「ますます裏を感じますか。まあ、どうしようとも貴女は貴女ですから仕方ありませんね。ただ、余計な詮索や邪魔は御法度ですよ」

「上辺だけの返事が必要でしょうか」

「いいえ。本音との違いで私を笑わせたいというのなら、話は別で

すが」

「……失礼します。行くぞ、ガヌ」

意味深な会話を交わしてから、シルラはガヌを促し、部屋を出た。サリアは自分の手を掴むシルラの手が、少し汗ばんでいるように感じた。

扉を閉めた音がした後、シルラはその場から離れた。手を引く彼女は、少し足早になっているようにサリアは思った。

「シルラ。ここらへんまで来れば大丈夫だ。そんなに焦って歩くなよ。サリアちゃんがついていくの大変そうだぞ」

ガヌも同じことを思っていたようで、階段を下りたあたりで後ろの方から呼びかけた。

「っ……」

言葉にならない声を発して、シルラが足を止める。掴まれている手は、強く握られていたために少し痛かった。

「話なら後でいくらでも聞いてやるから、今はとりあえずゆっくり歩け。な？」

「ガヌ……」

常の毅然とした口調と違って変わり、どこか泣きそうだった。

「大丈夫だつて。別になんにもしてきやしないさ」

「だいいが」

「ったく。いつもは強気な態度のくせに、打たれ弱いよな、お前つて」

「うるさい。どっちも私の性格だ」

「ああ、そうかい」

ガヌの声は、優しくかった。シルラはシルラで、手の力がほぐれる。サリアは自分の置かれている状況が、とても安全とは言えないと分かりながらも、二人の関係に考えを傾けずにはいられなかった。

「ガヌ」

「んー？」

「お前に言うのはあまり気が進まないが、今日のところは礼を言っ

ておく。ありがとう。ノックの件も含めてな」

「引つかかる言い回しだけど、どういたしまして」

続けての会話を聞いていて、サリアはともカリクに会いたくな
った。

（カリク。きつと、助けに来てくれるよね）

彼の積んできた訓練の数々を、サリアは一部しか知らない。しかも、戦い方を学んでいるからといって、助けに来てくれるという確証はない。それでもサリアは、疑わなかった。きつとカリクは、自分を助けに来てくれるに間違いないと。

冷静さを取り戻したシルラに連れられ、サリアはまた基地の内部を移動した。今度は何度も階段を下りていたのに加え、少し涼しい空間へ出たので、おそらく地下だろうと予想した。

長い廊下を直進したり曲がったりを繰り返し、しばらくして、

「ここだ」

というシルラの声がしてから、扉を開ける音が響いた。辺りがとても静かなので、不気味さがあつた。閉める音も、同じ感じに耳へ入る。完全に閉まりきったところで、目隠しをはずされた。

「うわぁ……」

さつそく開いた目に飛び込んできたのは、手狭な部屋だった。しかし、思わず感嘆を漏らしてしまうほどに、綺麗な室内である。床は赤い絨毯が敷かれ、右奥には真っ白なシーツのベッドがあり、真ん中には花瓶を乗せたテーブルが置かれていた。下手な宿泊施設より、レベルが高い。

「貴女には申し訳ないが、ここにずっといてもらうことになる。言葉を選ばなければ、監禁と言ってしまつて差し支えない」

あけすけな表現だった。ガヌが肩をすくめる。

「まあ、そういうこつたな。出れても研究所に行くくらいだろう。」

会えるのは俺たち軍人か、変な研究者共くらいだ」

「だろうな。ついでに伝えておくと、部屋の内外に監視も一人ずつつけさせてもらう。ただし、内側については、私から必ず女性にしてみらえるよう取り計ろう。私もできるかぎりはいれるようにする。貴女は嫌かもしれないが」

彼女らの言葉は、とても誘拐犯という悪人に思えないものだった。思わず、

「いえ、そこまでしていただかなくても」と、遠慮してしまうくらいに。

「いいや。できりがぎりはさせてもらう。貴女は気にしないでいい」「そうそう。こっちが勝手にやるって言ってるんだ。ただでさえ強引に連れてきたんだし、埋め合わせにはならないだろうが、素直に受け入れておいてくれ」

やはり、悪人には思えなかった。

「ただ、今日のところは私たちは失礼させてもらう。色々やることがあるのでな。貴女も休むといい。ゆつくりとは言わないがな」

「は、はい」

口調は堅いが、思いやりのある彼女にサリアはうなずいてみせた。そこで、外から声がした。

「ガヌ中尉、シルラ中尉。お待たせいたしました」

監視の人員である。ガヌが部屋の扉を開けると、男女が一人ずつ、外に立っていた。

「おー、ご苦労さん。行こうぜ、シルラ」

「ああ。ではな、サリア」

ガヌの呼びかけに応え、シルラはサリアにあいさつしてから、二人で扉へ向かった。去り際、シルラは監視の二人組に、

「上客だ。困らせるなよ。手荒な真似もするな」

そう言い聞かせた。

「……過保護だねえ」

隣では、ガヌが苦笑していた。

要人を匿うための地下室を後にして、シルラはガヌと肩を並べて廊下を歩いていた。

「で、何を考えてたんだ。あいつになんか言われたろ」

あいつとは、ミッドハイムのことである。切り出したのは、先ほどの総督室を出るときのことだった。

「ああ、あれか。ずいぶんとあっさり、あの子との対面を終えたなと思ってな」

「あー、確かに誘拐させるほどご執心なわりには、特に目立ったことはなんにもしなかったよな」

「そうだろう？　まるで、今のあの子には用がないようだった」

「用がない？　どういうことだ」

ガヌが訝しげな表情を浮かべた。

「はつきりとは説明できん。なんとなく、そう感じただけなのでな」彼の問いに、シルラは首を横に振った。

「なんにせよ、あの子にこれからいいことが起きると思えん。せめて、人間として扱ってもらえればいいが……」

心配そうに、歩いてきた廊下を振り返る。ガス灯が怪しく並んでいた。

「人間としてっていうのは無理だろうが、貴重な人材だ。研究者共も“いつもみたく”乱暴にはしねえさ。それに、させたくもないんだろ？」

「当たり前だ。せめて、私が手を出せる範囲は救ってやりたい。それに、お前も見ただろう。彼女を攫うときにいた少年を。彼と引き裂きたいと思うか？」

熱い口調だった。同時に、研究者たちへの嫌悪感も混じる。傍らを歩くガヌの目を見つめた。

「んあ？　い、いいや、思わないな」

彼は、一度目線を泳がせたが、最終的には目をしっかりと合わせて答えてきた。

「お前はいなかったけど、あのとき奴は銃を向けるのをためらわなかった。余程、大事な存在なんだろうな。“引き金を引く覚悟”があるかどうかは、まだ分からないけどよ」

シルラから目を離し、前を向く。少年のことを思い出してか、顔には微笑みがあつた。横顔に、シルラは尋ねた。

「……あの子を、救えると思うか？」

「それは分からない。分からないが、俺は賭けてるぜ。何かしてくれるってな」

表情を変えずに、強く言い切った。

「そうか。なら、私もそう考えておくでしょう。どうせ……」

シルラは自嘲気味に微笑んだ。一度言葉を切り、横目で後ろを見る。

「私たちが何かを起こしても、どうにもならないのだからな」

ガヌとシルラが地下を後にしてどれくらいたっただろうか。サリアは、女性軍人の監視の下、できることもなくベッドに横たわっていた。外が見えないので、時間が分からない。かといって、見張りをしている軍人に訊く気にもならなかった。

心の中は、不安でいっぱいだった。これからどうなるのか、まったく分からない。ミッドハイムのこと、不気味だった。一体、何をされ、何をさせられるのか、皆目見当がつかない。

（カリク……）

幼なじみの少年の名前を、心中で呼ぶ。彼女の場合、本当に彼へ届くかもしれない呼びかけだった。ただし、どういう条項が満たされていれば伝わるのかが分からないため、望み薄の行為である。

と、そこで地下室に訪問者が現れた。

「邪魔するぞ」

「お、お疲れ様です。シルラ中尉」

シルラだった。監視をしていた軍人が、慌てて頭を下げる。

「ああ、お疲れ様。悪いが、少し彼女と話したいことがあるから、席をはずしてくれるか？ 三十分ほど、休憩にしている」

「休憩、ですか？ しかし、今は私の監視時間帯で……」

「いいから、行ってこい。私が勝手に代わると言っているだけなのだからな」

「わ、分かりました」

渋る部下の肩を叩き、シルラは微笑んだ。そう何度も上司の頼みをつっぱねられないと思ったのだろう、部下は承諾した。「失礼します」と言ってから、部屋を出る。サリアとシルラだけが残った。

「……何か用事ですか？」

敵意はなく、ただ純粹な疑問だった。

「用事だな。ただし、個人的な話だ」

シルラは、部屋の真ん中にあるテーブルの椅子へ腰を下ろした。背もたれに体重をかける。

「個人的な話？」

彼女からの個人的な話とはなんだろうかと、サリアは首をひねる。思い当たる事柄がなかった。

「ああ。メシアで貴女を強引に連れ去ろうとしたとき、少年があの場にいらだろう。彼のこととちよつとな」

「カリクのこと……？」

ますます、どんな話をする気なのか分からなくなる。カリクの話というのはなんなのか。彼とは、関わりがないはずである。

「そうだ。私はちらっと見ただけだが、彼は貴女を護ろうとしていたのだろう？ ガ又はナイフを持っていた。なのに、あの少年は貴女を護るために、奴と対峙した」

「それが、どうかしたんですか？」

彼女が何を言わんとしているのかが、見えてこなかった。

「特別どうというわけではない。ただ、彼にとって貴女が、命懸けで護りたい大事な存在だというのを確かめたかっただけだ」

サリアの問いに、シルラは微笑む。その瞳に、ある感情が浮かんでいる気がして、尋ねた。

「シルラさん、羨ましいんですか？」

瞬間、眉が動き、彼女は目を見開いた。まさかとサリアは思っていたのだが、間違っていないかと思ったら思い直す。シルラの瞳に浮かんでいた感情は、羨望だった。

「羨ましい、か。そうだな。私は、あの少年に命を張ってもらえる貴女が、羨ましいのだと思う」

今度は言葉でも認める。続けて、サリアへ訊いてきた。

「貴女から見て、あの少年はどんな存在だ？」

軍人としてではなく、一人の女性としての質問に、サリアは思えた。ゆえに、同性の一人として答える。

「大切な人です。家族とは違うけれど、とても特別な位置付けにいる人。それが、私にとってのカリクです」

「ふん。恥ずかしげもなく、よく言ってくれるものだ。憎たらしくなってくる」

頬杖をつきつつ、シルラは苦笑した。穏やかな空気が流れる。自分が捕らわれの身であることを、思わず忘れてしまいそうだった。

「シルラさん。私からも、一つ訊いていいですか」

「なんだ？」

「ガヌさんとは、どういう関係なんですか」

その雰囲気に乗じ、ずっと気になっていたことを訊いてみる。ここまで彼らと場所にいて感じ取ったかぎり、ただの同僚には思えなかった。

シルラは、最初こそポカンと口を開けたが、

「ガヌか。別に、あいつはただの同僚だ」

すぐに素っ気ない言葉を返した。ただ、表情には寂しさがよぎった。恥ずかしさでも、動揺でもなく、寂しさである。何がある。直

感が告げていた。

「本当に？」

試しに、追い討ちをかけてみる。今度の返答は、早かった。

「本当だ。他に何かがあるわけでもない。たまたま同期で、たまたま同じ任務にあたるのが多いだけだ」

強い否定だった。だが、表情との総合を考えると、サリアはそのままの意味で受け取れなかった。

「シルラさん……」

はつきりとした言葉にはせず、その一言に思いを詰める。向こうも察したようで、

「詳しい事情は分からないが、ガヌは何かを背負っている。近づいたと思っても、真に深いところまでは踏み込ませようとしめない。誰にもな」

短くも、的確な表現を紡いだ。詳細は伝わらなくても、彼女の想いは感じ取ることができた。

「だから、私も隣に行けない。行こうとしても阻まれる。どうしたらいいのか、もう分からない、私は」

肩をすくめ、彼女は天を仰いだ。サリアに向き直り、話しかけてくる。

「貴女は、軍のトップが関わる陰謀の中心に置かれていながら、見たところ絶望していない。なぜだ？　なぜ、そんなに輝いた目をしている？」

なされた質問は、サリアには簡単に答えられるものだった。一瞬、目を細め、口を開く。

「シルラさんとガヌさんが、誘拐犯らしくないから、っていうのも」ありますね。でも、一番大きい理由は……」

一呼吸置き、堂々と言い切る。

「信じているからです。きっと、カリクが来てくれるって。どんなに困難でも、どんなに相手が強大でも、カリクなら、きっと」

疑いはなかった。証拠のない自信だが、それがサリアにとっての事実なのである。

「信じているから、か。なるほどな。それが、絶望を打ち消す方法か」

シルラは、口元をわずかに緩ませる。どこか、すっきりした感じだった。

「礼を言う。私も、貴女と一緒に信じてみよう。もう少しだけ、な」
「……はい」

彼女の目線を受け、うなづく。心の内で、少年を想った。

（信じてるよ、カリク）

揺らぐことなく、輝き続ける。

五章『闇での遭遇』

少し、時間は巻き戻る。サリアが首都で、地下室に入れられたいだった。

原っぱの真ん中を貫くように伸びる、とりあえず道として整備されたオフロードを、一台の車が走っていた。白の車体のそれは、カリクとレインの乗っているものである。二人がニケアを出て半日以上が経ち、太陽の位置は低くなっていた。

「首都まで、あと丸一日くらいか。確実に燃料不足だなー」

「……別に、今更念を押さなくても、やるときはやる。手段を選んでいられないって言ったはずだ」

助手席に座るカリクは、ハンドルを握るレインの顔を見ることがなく言葉を返す。いかんせん、免許を取得できる年齢に達していない二人は、免許など持っていないのだから、燃料は勝手に拝借するほかない。

「悪かったよ。まあ、金を置いていくつもりだっただけで、良心的だと思うぜ」

レインが唇の端を持ち上げる。横目で見てきたので、

「前見る」

と、冷たく言い放った。

「へいへい。つれないわねえ、カリク君は」

気持ち悪い口調で文句を垂れ、レインは前に向き直った。と、何かに気づいて、ブレーキを踏む。助手席のカリクは前につんのめった。体勢を直してから、隣の少年を睨む。

「なんだ、急に」

「ああ、悪い悪い。あれが目に入ったもんで」

まったく誠意の感じない謝罪の後、前方を指差した。そちらに目をやると、

「なんだよ。ただの立て札だろ」

二方向に割れた分かれ道と、どこに続くかを表記した木の札があった。片方は、首都セルゲンティスへ向かう道。もう一方は、長くは北のミリシアへ繋がっている道だった。あとは、最寄りの町の名前と、だいたい距離が書かれている。

「あれ自体はな。書かれてる、最寄りの町が問題なのさ」

レインが、言いながら車を降りる。首をひねりながら、カリクも続いた。二人で、札の前に立つ。

「このミリシア方面に書いてある、シャズって町だ。ここに、確かに軍の秘密の施設がある」

「秘密の施設？ シャズに、軍の施設なんて、なかったと思うんだが」

顔をしかめた。成り立てとはいえ、少将の父を持つカリクですら、そんな話は聞いたことがない。

「そりゃ、秘密だからな。俺っちが知ってるのは、境遇と偶然のせいだよ。首都の研究所と軍の、かなり上の方の人間じゃないと、普通は知らない」

軽い口調のレインだが、話している内容はかなりとんでもない。

少将クラスよりも上の人間しか知らない情報を、なぜ知っているのか。

「お前、何者だ」

素直に思ったことをぶつけてみる。

「この国の被害者、かな？」

含み笑いから真意を見出すことは、カリクにはできなかった。

「とにかく、シャズには間違いなく施設がある。見つけられるかどうか分かんけど、痕跡があれば俺っちが探し出せるかもしれない。どう？ 寄り道になるけど、探ってみるかい」

自分についての話を切り、レインはそう尋ねてきた。カリクは、黙考する。寄り道なので、時間が無駄になってしまいかもしれない。しかし、父親も知らない情報が手に入る可能性もある。ほぼ、何も知らない現状では、かなり重要なものになるのはまず間違いなかつ

た。

サリアを助けるために時間を無駄にしないか、それともサリアを助けるために寄り道をするか。しばらくして、カリクは結論を口にした。

「……シャズに行く。早く出るぞ」

「おつ、即断即決とは素晴らしいね。さすがカリク君」

カリクは無視して、車へ戻る。後ろから、

「もう少し相手してくれても、いいと思うんだけどなー」

と聞こえたが、気のせいにした。

三十分ほど車を走らせてたどり着いたシャズの町は、カリクの家があるキュールよりも、さらに小さなところだった。ほとんどが農業と畜産業を生業にしているので、感覚としては村に近い。

人工的なものが少ない、緑と土と空が存分に見られる景色を眺めながら、カリクがつぶやく。

「……家と人と、牛と畑しかないな」

「いやいや。牛乳と牛肉とチーズもあるぞ」

「飲食物が増えたただだろ、それ」

すかさずつぶやきを拾ってきたレインに、気のない言葉を返す。

「おお……」

すると、彼は完全に横を向いてきた。目を見開いている。何事かと一瞬訝しみ、すぐにあることに気づいた。

「どこに目を向けてんだ！ 前を見る、前を！」

「あ、ごめんごめん」

指摘され、慌ててレインは前へ顔を戻す。特に何も起きなかったが、場合によっては大惨事になっていてもおかしくない行為だった。声を荒げる。

「何してんだよ！ 下手したら、事故だぞ！ 誰か轢いたら、シャ

レにならない！」

「悪かったって。いや、まさかカリク君が、俺っちの発言に、ツッコミを入れてくれるとは思ってなかったんで、びっくりしちゃってさあ」

一方のレインは、あまり脇見運転自体には動揺していない。別の事柄に驚いていた。彼の言い訳を聞いて、思う。

（雑に流した言葉がツッコミ扱いとは……）

いちいち驚かれていては、命に関わるので今後はもう少し反応してやろうかと、本気で考え出すカリクであった。

「それにしても、お前の言ってる施設はどのあたりにあるものなんだ？ 町の規模が小さいにしても、しらみつぶしに探す余裕はないぞ」

一旦、ツツコむツツコまないを脇に置き、施設についての話題に移る。

「んー。見当をつけるとしたら、廃屋だな。人が住んでないのに、人の出入りした跡があれば、限りなく黒だ。軍内部でも一級品の機密事項を扱ってるところなんだから、あんまり人が近づかない場所にあつて然りだろうさ」

「廃屋か……。探してみるしかないな」

この小さな町なら、合致する建物はさほど数多くなさそうだった。まずは役場などがある、町の中央へ車を走らせた。

「今のところ、一番怪しいのはここかな」

かすれた文字で、『宿泊施設・ジャッジ』と書かれていた。郵便受けを見たところ、ジャッジはファミリーネームらしい。

町中を回った結果、廃屋はやはり数少なく、その中でレインが目をつけたのは、かつて宿泊施設だったのであろうこの建物だった。一階建てだが、敷地が広く、おそらく潰れてから年単位は経ってい

そんな様子である。

「施設にするなら、ある程度の広さが必要だから、ここが一番怪しい、か。確かに、見方としてはありだな」

カリクは入り口を少し見つめ、中へいこうと足を前へ動かした。

「動き出すの早いな」

後ろからそう言ってきたレインへ、

「時間が惜しいからな。何度も言わせるな」

横目だけを向けた。すぐに前へ戻す。「へいへい」と気のない返事ののち、相棒となっている少年は横に並んできた。

中は薄暗かった。まだ夕日が差し込んでいるものの、仄かな橙色は、不気味さを演出している。あちこちにホコリが溜まっていた。

「長いこと使われてなさそうだな」

天井の隅に張られている蜘蛛の巣を見上げながら、カリクはそう口にした。

入ってすぐにある、ロビーらしき場所だった。宿泊施設のロビーだが、見た感じは病院の待合室に近いものがある。受付が左にあり、あとは右隅に至るまで五人がけくらいの長椅子が、三列ほど並んでいる。廊下は、正面と左の二方向に伸びていた。

「いいや、そうでもないかもしれないぜ、カリク君」

「何？」

自分の言葉に対するレインの返しに、耳を疑った。

「ホコリの積もり方に、なんか差があるんだよ。例えば、こことか」
彼が示したのは、受付の内側へ入るためにある、小さな地面から浮いた扉だった。細い扉の上部を見ると、ホコリの濃さが違って見えた。一度なくなってからまた積もったという感じである。

「なるほどな。誰かが一回触って、積もり方の差が出てるわけか。でも、近所の子供が遊びに来ただけかも知れないぞ」

「そーだなあ。でも、俄然やる気出てきたぜ」

「なんのやる気だ」

先ほど頭に浮かんだ考えのとおり、気のない感じながらも言葉を

返す。するとレインは、振り返ってきて、

「なんか、宝探してみたいで、ワクワクするじゃんか」

活き活きとした表情をした。カリクは、肩をすくめただけだった。やり取りもそこそこに、二人は探索に移る。

「うーん。ここもはずれかな。なんの形跡もないし」

「じゃあ、次だな」

レインの発言を受け、カリクは先に部屋から廊下へ出る。「ほいほい」と、レインも続いた。

二人は一緒に行動して、廃屋の中を探索していた。分かれてもよかったのだが、万一ここに施設があり、何者かがいたら危険だという判断だった。日が沈みかけており、灯りもないというのもある。

回り方としては、ロビーから左に伸びていた廊下の方へまず行き、一部屋一部屋確認しながら、一週してロビーの方へ戻るといいうなり方にした。五部屋程度確認は終わっており、今のところ何も発見はない。

「ん、廊下が二手になってる」

おそらく半分あたりと思われるところで、レインが足を止めた。廊下が真っ直ぐと右折に分かれていたのである。徐々に面積を増している暗闇の中、ホコリをかぶった案内板のかすれた文字を目を凝らして読み取ったところによると、直進すると食堂と浴場があるらしい。

「先にこっちに行くか」

「あいよー」

特に後回しにする理由もない。二人は直進した。ほどなくして、右手に両開きの扉が現れた。扉の上を見ると、“大食堂”とある。ただ、食の字はほとんど判別できなくなっていた。

「では、失敬」

レインがカリクの前に出て、扉をゆつくりと内側へ開ける。錆びた音が響いた。中には、乱雑に椅子が乗せられた机が並んでいる。二人とも中に入り、カリクが後ろ手で扉を閉めた。

「……一層汚いな、ここは」

カリクがつぶやいた。廊下よりも、空気がまずくどんよりとしている。

「そうだな。でも、ここは当たりかもしれないぜ、カリク君」

室内を見回していると、レインが閉めた扉の方を向いて屈み、床を見ていた。

「どういうことだ？」

「入り口とおんなじだよ。ホコリが薄いところがある。つい最近に、扉が開け閉めされた痕があるし」

「何？」

彼の言葉を聞いて、カリクは隣にしゃがみ込んだ。確かに、入り口よりもはつきりと、ホコリの濃さが違っていた。

「誰かがここに入ったってことか」

「そういうこと。しかも最近だ。下手したら、ついさつきかもしれないぜ」

説明しつつ、レインは腰を上げる。顔には、いたずらっぽい微笑を浮かべている。

「ついさつき、か」

もし本当に秘密の施設がここにあり、扉を開けて食堂に入った人間が施設に関係しているならば、見つかるのかならずい。秘密裏にされている場所なのだ。親切に、玄関まで送ってもらえるとは思えない。

「慎重に探るぞ。お前の見立てが正しいなら、敵と遭遇するかもしれない」

「あいよ」

声を抑えたカリクの言葉に、レインが呼応する。それから二人は、食堂内を隅々まで確認していったものの、壁にも床にも、怪しい痕

跡は見られなかった。

「あつりー？ こりゃ、はずしたかな」

一番右隅の壁におかしなところがないのを確認したレインが、首をひねった。危機感なく、声を響かせる彼に、カリクは眉根を寄せる。

「敵がいるかもって言ったよな。あんまり、でかい声を出すな」

「いや、もう、むしろ見つけてもらった方が楽だと思っぜ。無駄な時間と労力が省ける」

「敵にやられて、時間が止まるかもしれないけどな」

身体を伸ばしながら、暢気な発言をしたレインに、皮肉を込めた言葉を贈る。今のところ他の人間の気配は感じないが、痕跡があったのだから、油断はできない。

「確かにそうかもしれないけど、あんまり気を張りすぎてもどうかと思うぞ、カリク君。現に、今俺っちたちは生きてるし、敵の姿も見えない。見えないものに気を使うことほど疲れることはないぜ」
しかし、対する少年は気楽なものだった。笑顔を見せる余裕すらある。

「……ずいぶんと樂觀的だな」

「んー、そうか？ まあ、そうなのかもな。“そうじゃないとやっていけなかったし”」

カリクがジトリとした目を向けると、レインは調子を変えることなく、そう言った。いかにも、意味ありげに。

「ああ、そうかよ」

カリクは短い言葉を口にただけで、今の話題を切った。もちろん、レインの言い回しは気になっていたが、掘り下げる必要性はないという判断をしたためである。

気持ちを探索に戻す。食堂はもういいだろうと思ったカリクの視線は、奥にある厨房に向いていた。食堂と直でつながっており、二人の位置からも中を窺うことができる。錆だらけで、鍋がひっくり返っていたり、包丁類が乱雑に置かれていた。落ちている、と言っ

た方が適切かもしれない。

「あの中も見てみるか」

「ん、厨房か。そうだな、一応見てくか」

カリクの案に、レインも乗っかる。二人で、食堂端から厨房へと入った。

内側から見ると、中の荒れ具合はより酷かった。人が三人は通れるであろう通路があり、床は油染みや錆が覆っていて、やはり食器類や調理器具が散乱している。手前には水場があり、その隣には火を扱うのである場所がある。どちらも、今は使えそうにない。一番奥には、人間二人は突っ込みそうな大きさの冷凍庫が見えた。

「こりゃひどいな」

惨状という言葉を使ってもいいであろう光景に、カリクはそう漏らした。隣のレインもうなずく。

「そうさな。ずいぶんと荒れ放題なもんだ」

「とりあえず、見てみるか」

観察もそこそこに、本格的な探索に入る。戸棚なども丁寧に回るが、特に不審な点はなかった。

「うーん……。ここにも、なんもないのか。俺っちから提案しててなんだけど、気が滅入ってくるぜ。汚いしー」

レインが、水場の周辺をいじくりながら嘆く。冷凍庫のそばにいたカリクは、たしなめる。

「元々、機密なものなんだ。簡単には見つからないだろ。もしかしたら、見つからないまま終わるかもしれないんだ。もう少し辛抱強く探せ」

「そうは言うけどよー。正直しんどいぜ……」

文句は言いつつ、手は止めない。言葉ほど、我慢が利かないわけではないらしい。カリクも、黙々と作業を続ける。冷凍庫を開けようと、手をかけた。手前に引っ張る。その感触に、眉をひそめた。

「ん……？」

「どうかしたのか、カリク？」

レインが気づき、後ろにやってきた。肩越しに覗き込んでくる。
「いや、この冷凍庫、長いこと放置されているにしては、簡単に開きすぎる気がして……」

しゃべりつつ、開く。生肉や魚、またその鮮度を保つための氷類もなく、空っぽだった。一見、おかしいところはない。しかし、今度はレインが気づく。

「なあ、底のところがはずせるんじゃないか。妙に綺麗だぜ」

「確かに、そんな感じがするな。ちよつと待て」

カリクがしゃがみ、冷凍庫の底をいじってみる。すると、動く感触があった。

「当たり前だな。上か下に押すと、横にスライドさせられるみたいだ」
言いながら、実際にやってみせる。完全に動かし終わると、さらに深い闇へと誘うであろう、下り階段が待ち受けていた。

「地下への階段、か。よくまあ、こんなもんを作ったもんだ」

「だなー。でもまあ、首都の奴はやることがぶつ飛んでるから、想定範囲内ではあるけど」

二人で、ぽつかりと口を開けた闇を覗き込む。先はほとんど見えない。

「さすがに灯りがあるな。レイン、お前なんか持つてるか」

「いや、俺たちは持つてない。でも、廊下にガス灯ならあったと思うぜ。付くかどうかは分からないけど」

「試す価値はあるな。行くぞ」

「あいよ」

単独は危険だという意図を汲み取り、レインが同意を示した。一旦キッチンを離れ、食堂を通り抜けて廊下へ出る。ガス灯は、壁から伸びた台座にくっついていていた。

「ん、固定されてる」

「関係ない。とりあえず、離す」

レインの言葉を弾き、服の内に隠していた銃を抜く。ためらいなく、壁とガス灯をつないでいる部分を打ち抜いた。甲高い銃声が響く。

く。ガス灯が、床に落ちた。レインが口笛を吹いて、「過激だねー」と軽口を叩く。

「敵さんを警戒するんじゃないの？」

「でかい声を出してたお前に言われるとはな。別に、構わないさ。あの隠し戸を開けた時点で、地下に音は響いているだろうから、今更、感づかれることを警戒する必要はないだろ」

「そんなもんか？」

カリクはガス灯を拾うと、火がつくかどうかを試した。問題なく、仄かな紅い光が灯る。首をひねっているレインに呼びかけた。

「行くぞ」

「あいよー」

灯りを片手に、暗闇への入り口へと戻った。踏み込む前に、カリクは傍らの少年へ問いかける。

「準備はいいか、レイン」

「もち。そつちこそ、ひびるなよ」

「ふん」

返ってきた答えを聞き、カリクは満足そうに鼻で笑った。今から潜る黒を真っ直ぐに見つめ、

「じゃあ、下りるぞ」

「よしきた」

カリクを前にして、二人は階段を下りだした。

「本当に真っ暗だなー。ただでさえ夜だっていうのもあるけど、上の光が全然届いてねーや」

数十段進んだところで、レインが後ろを横目で見た。カリクも声につられて、振り向く。それほど実感はなかったが、既にそれなりの深さまで潜ってきていた。

歩み続けると、やがて階段が終わり、開けた空間に出た。端っこは目視できないが、足音の反響音でなんとなくの広さを想像する。

「けっこう広そうだな」

「だな。ちよっと、壁際を見てみようぜ」

レインに促され、壁づたいに部屋の左端へ行く。カリクの手中にあるガス灯が、“それ”を照らし出した。

「……なんだこりゃ」

あったのは、多くのボタンやレバー類だった。簡単に言えば、巨大な機械が設置されていた。

「へえー。これ、首都でも限られたところにしかない、“パソコン”ってやつだぜ」

「パソコン？　なんだそれは」

聞き慣れない単語だった。

「俺っちも詳しくは理解してないんだけど、なんでもいろんな情報とかを保存したり解析できたりするらしい。ざっくり言うと、すごい機械って感じだな」

「一ミリも分からないな。とりあえず、こいつは今、使えるのか？」
説明されてもピンとこなかった。話題を変える。

「いんや、たぶん大本のエネルギーが供給されてきてないみたいだから、使えないと思う」

「その大本のエネルギーって、なんだ？」

「そこまでは分かんない。首都の研究所にあったやつは、原理は理解できなかったけど、風とか火とかから動力を作ってるのかなんとか聞いたな」

「風に火？」

ますますわけが分からなかった。その要素からこの機械を動かすというのが、腑に落ちないのである。“電気”というエネルギーがこの国で発見されてから歴史が浅く、カリクが科学分野の知識を持っていなかったのも、当たり前のことだった。

「まあ、細かいことはメシアの工場のことでも調べてみなよ。多少なりとは、学べると思うぜ」

しゃべりながら、レインは眼前の機械をあちこち触りだした。しかし、反応はまったくない。

「んー、やっぱだめか」

「それはもういい。こだわる理由もない。他に何かないか探るぞ」
頭をかく彼に、カリクはそう声かけをした。時間がもつたいないというのもある。大きな機械から光源を離し、別の場所を見ようと振り向いた。

「右に避ける、カリク！」

と、不意にレインが叫んだ。反射的に言われた通りの方向へと避ける。その数瞬後に、機械の方へ何かめり込んだ。カリクはわざわざ振り向いて確認したりはしなかった。疑いなく、銃弾に間違いなかったのである。敵に場所が丸分かりになってしまふと考え、ガス灯の光を消した。完全に近い暗闇が、身体を包み込む。

しばらく、音すらも消えた。カリクは、見えざる敵に位置を悟られまいと黙って、物音も立てないように息を潜めているのだが、レインと見えざる敵も、同じことをしているらしかった。

それから一番に耳に入った音は、低く重たい男の声だった。

「よくできたガキどもだ。動いたら危険なことを、よく分かっている」

カリクの中でもレインのものでもない、敵の声。口を開いたわけが痺れを切らしてか、それとも余裕からかは判断できなかったが、とにかく聴覚で敵の位置を探りにかかる。

「それにしても、お前ら何者だ？ ただのガキなら、こんな冷静な判断はなかなかしない」

カリクは、何も答えなかった。レインも、黙っている。

「返事もなしか。ふん、本当によくできた奴らだ。それとも、怖くて動けないだけか？」

男の言葉が続く。

（ちつ。だいたいの方向の予想ができるくらいか。位置が全然分からねえ）

しかし、場所の予測が立てられない。内心でカリクは悪態をついた。

そのとき、近いところから何か風を切るような音がした。聞いた

ことのあるものだった。

「ぐっ!？」

男が突然、苦しげに声を漏らした。何が起きているのかはまったく見えないが、先ほどの音から察する。

(さっきのは、“刃物が風を切る音”だ。レインが攻撃したか)

納得できる解答を引き出すと同時に、疑問も生まれる。

(けど、どうして敵の位置が分かるんだ。ある程度、暗闇でも目の利く俺すら、なんにも見えないっていうのに)

「ずいぶんと、厄介なことをしてくれるものだ。暗闇で正確に、位置を当ててくるか。数ヶ月前に、火事に乗じて“ジーニアス”から逃げ出した子供がいたと報告をもらっているが、お前がそうみたんだな」

(“ジーニアス”?)

ひそかに首をひねる。耳にしたことのない単語だった。おまけに、火事や報告といった、気になる言葉も混じっている。

ただ、当の本人はやはりしゃべらない。口車に乗って、うっかり場所を知らせまいとしているのだろうか。

「らちがあかないな。奇襲も失敗しているし、そっちがこっちの場所を把握できるなら、この状況にこだわる理由はあるまい」

彼の対応を受け、敵の男がそう言うと同時に、急に明かりが点いた。ガス灯ではない、何か人工的な光だった。

「あら、電球っすか。まいったね、こりゃ」

姿が晒された時点で、レインはすっぱり黙るのをやめた。敵へ目をやる。カリクも、彼と同じ方向を見た。

立っていたのは、大柄な男だった。筋肉質で、岩のような出で立ちをしている。重厚という言葉が、カリクの頭に浮かんだ。黒の軍服を着ていることから、軍の関係者であるのは、疑いようがない。

男は、右手に黒く光る拳銃を手にしていた。

「さて、これで心置きなくしゃべれるだろ。好きに話すでしょう」

男の顔に、嫌らしい笑みが浮かぶ。下品な感じだった。

「あんだ、軍の人間か」

カリクが口を開いた。まず、確認する。

「そうでないとしたら、何に見える？」

相手は、わざとらしくそう答えた。まどろっこしい言い方だが、軍人で間違っていないらしい。

「それにしても、もうずいぶん前に捨てた施設に、まさか侵入者がいるとは思わなかった。お前ら、何をしに来たんだ？」

「さあてね。なんでだと思う？」

レインがうそぶいた。しかし、敵の男は特に怒る様子もなく、想像もつかないな。情報が足りない」

冷静な返しをした。肩透かしをくらった気分なのだろう、レインは眉をわずかに潜めた。

「それに、分からないなら分からないでもいい。お前たちの目的がなんだろうと、やることは変わらないからな」

彼の反応を気にとめず、男は手にある銃を、二人に示してきた。「ここで、死んでもらう」

抑揚なく、言い放つ。殺すということへのためらいが、欠片も見られなかった。カリクとレインが、声を揃える。

「断る！」

カリクもためらいなく、まず銃を持つ敵の手を狙って発砲した。

狙いを瞬時に察せられ、寸前の間で避けられる。

「ちっ」

軽い舌打ちをしながら、カリクは敵から目を離さずに、左へ走った。男との間に挟めそうなものは、何もない。ゆえに、身を隠せるものがあるかもしれない、男が来た方向に抜けたかった。入り口に返ろうとしたところで、狭い階段では狙い撃ちされるのが関の山なのである。

「ビックリしたな。まさか、ガキが銃を持つてるとは」

「最近の子供は進んでんだよ」

カリクが適当な言葉を返す。

「そういうこつた！」

それにレインも乗った。同時に、ナイフを飛ばす。男は、ナイフを軽いステップでかわす。ひそかにつぶやいた。

「二対一、か」

カリクは相手の銃口から目を離さないように、男から距離をとる。（押し切れる。相手の方が地力は上だが、俺とレインの力を合わせれば、勝てないことはない）

考えを巡らせていると、声が挟まった。

「二人で押せば勝てる。そう思っているだろう」

凶星の指摘だった。しかし、なんとか動揺は押さえ込む。男の表情をうかがった。

「甘いな。もしそうなら、二人いっぺんに相手したりしない」

気味の悪い微笑があった。思わず、背筋が凍ってしまうほどの。

そして、トンと、この場にいる三人のものではない足音が、静かに、しかし確かに響いた。方向は、男の背中に見える廊下のような方からだった。

「複数かよ……」

意味しているのは、別の人間の存在。カリクの計算を、たやすく崩してしまう要素だった。

「おいおい、これはヤバげだぜ、カリク君。どうする？」

ナイフを構えるレインも、当然その足音に気づいている。口調の軽さとは裏腹に、うまく笑えていなかった。

「……決まってる」

問われたカリクは、敵の方へ見つつ答える。そんなに難しいことではない。本来の目的を考えれば、一択だった。

（こんなところで終われるわけがないだろ）

選択肢は、逃走しかなかった。ただ、大きな問題として、入り口へ戻る場合、完全に背をとられてしまうことがある。そうなれば、まず間違いなく簡単に命を落とすことになってしまう。

（どうする……）

必死に頭を活動させる。

（どうする！？）

自分たちがいるのは、開けた空間。遮蔽物になりそうなものはない。入り口に通じる階段と、先の見えない廊下がある。上には、光を発している物体が五つほどぶら下がっていた。その刹那、答えが閃く。

「レイン、援護しろ！」

「何を！？」

叫び返されたことを無視し、カリクは銃を構えた。敵にはない。何を……？」

狙いが分らないようで、敵の男は顔をしかめた。こちらも意に介さず、弾を放った。直後に、ガラスの弾けたような音が響き渡った。

「な……」

「なーるー！」

男とレインが、それぞれ反応する。カリクが撃ったのは、五つある電球のうちの一つだった。光源をなくすつもりなのだ。

「させるか」

心外だと言わんばかりに、男は言葉を漏らした。カリクに銃口が向く。

しかし、

「させるかをさせるか！」

陽気な声とともに飛んだナイフによって、狙いはズレた。その間に、カリクは二つ、三つと光源を破壊していく。

「無駄なあがきを……」

「無駄かどうかは、やってから判断してくださいさー！」

レインの攻撃が続く。そして、ついにすべての電気が消え去った。再び、暗闇がすべてを包む。

「レイン！ 俺を引っ張れ！」

「ほいきた！」

その中で、声だけのやりとりを交わした。敵の声が被さるように響く。

「逃げられると思うな！」

おそらく、攻撃しようとしたのだろう。かすかな音が耳に入った。しかし、いつまで経っても、銃声はない。

「逃げてみせるっの！」

レインが、攻撃を途絶えさせていないからだった。目視はできていないが、彼はナイフを投げていると、手を引かれるカリクには、音となんとなく伝わる動きから想像がついた。そのまま、入り口へと通じる階段を上がり出す。威嚇で、カリクは一発撃った。

「さあて、これからどうするんだカリク君？ 後ろから撃たれたら終わりだぜ」

先を行くレインから問われた。こともなげに答える。

「問題ない。上がりきるまで、下に弾を打ち続けてやれば、向こうは階段を上がってこれないはずだ」

同時進行で、引き金を何度も引く。床に着弾した音が何度もする代わりに、敵からの攻撃はこなかった。

しばらくして、一番上に薄い光が見えてきた。太陽やガス灯を光源としていない、夜という灯りである。

「あと少しだぜ、カリク君！」

レインが叫んだ。耳には入れているものの、特に返事はせず、下方へ撃ち込み続ける。数秒して、ついに一番上へとたどり着いた。

「車まで走るぞ。まず、この場から離れる」

「承知！」

カリクとレインは、一目散に車へと走り出した。キッチン、食堂と通り過ぎ、廊下へ出る。足を止めずに、さらに駆けていく。玄関にたどり着いた二人は、外に出ると、すぐさま車に乗り込んだ。

「カリク、あいつは来てるか？」

運転席に滑り込んだレインに問われ、カリクは助手席へつく前に廃屋の入り口を見た。

「いや、まだ来てない。とにかく、さっさと行くぞ」

誰の姿も見えなかった。席に腰を下ろし、レインを促す。

「あいあいさー！」

それを受け、彼は元気よく返事をする。エンジンをつけた。アクセルを踏み込む。カリクは万々にそなえ、後部座席から廃屋の入り口方向へ銃を構えた。徐々に離れ出す。

しかし結局、再び男を見たりはしなかった。

「巻いたか……」

肩から力を抜く。一旦は脅威から逃げ切ったと考えてよさそうだった。後部座席から、助手席へと戻り落ち着く。

「いやー、危なかった、危なかった。さすがにびびったぜ」

ハンドルを握るレインが、ほっとした表情を浮かべた。カリクは、厳しい視線を向ける。

「お前、何者だ？ 本当ならどうでもいいところだが、サリアが攫われた理由と関係があるなら、話が変わるぞ」

珍しく、レインは黙り込んだ。口元は笑ったままだいるのだが、明らかに様子がこれまでと違う。

「答える、レイン。お前は何者だ？」

さらに追及すると、彼は一度息を吐いてから、

「何者つてわけでもない。ただの、被実験対象者だったってだけだよ」

嫌々といった感じに、口を開いた。

二人の少年が去った、謎の地下施設。男はまだそこにいた。

「逃げられたな。たいした奴らだ。ガキだが、元気な分、対応しづらいもんだ」

男は一人でつぶやいていた。暗闇に、声が吸い込まれていく。

「しかしまあ、こんなところまで来てることを考えると、そのうち

に会う機会があるかもしれないな」

一旦言葉を区切り、この場所を出るために男は“それ”へ呼びかける。

「行こうか、父さん」

闇の中で、何かが蠢いていた。

第六章『施設』

「実験？」

夜を走る車中、カリクはレインの発言に眉を寄せた。

「そうだよ。あの施設は、首都に本部がある、“ジーニアス”ってところだ。聞いたことないだろ」

「ないな。そのジーニアスとやらは、なんの研究をしてるんだ」

「オモイノチカラ」

「はっ？」

彼から放たれた単語は、意外なものだった。

「カリク君の彼女が持つてるっていうやつさ。その研究をしてるんだ」

いつもの朗らかさはまったく見えない。いつの間にか、笑みも消えていた。

「研究って……。何をどうするっていうんだ？ あんな力を持つ人間なんて、一握りもないだろ」

「ああ、数はまったくいない。ただ、“力”の持ち主はいる。カリク君の彼女とは、かなり性質が違うものっぽいけど」

カリクの指摘に理解を示しつつ、力の持ち主がいることを言及してくる。誰のことなのか、察しがつかなかった。

「“力”の持ち主って、誰のことだ」

知っている人間かどうかはともかくとして、まず尋ねる。そして、彼の挙げてきた名前は、

「“軍王”、ミッドハイムさ」

「ミッドハイム！？」

あまりにも有名で、にわかには信じられないものだった。

「奴が、“オモイノチカラ”を持つてるっていうのか？ そんな馬鹿な。だったら、どうしてサリアを攫ったんだ。もう“力”はあるはずだろ」

「詳しい事情は、俺たちにも分からない。ただ、ジーニアスを設立したのはミッドハイムだし、秘密裏に諸々の調査を行わさせてるって話もある。なんかの事情で、“オモイノチカラ”にご執心なのは間違いないと思うぜ」

話しつつ、レインが車の速度を落とす。一応の脅威からは逃れたという判断らしい。

「理由は分からないが、とにかく“力”を求めてるってことか。奴自身の“力”はどんなものなんだ。サリアとは、違うんだろ」

「ああ。人の心に声を届けるわけじゃない。ちらつと聞いた話じゃ、こっちの考えを読み取ってくるらしいぜ」

「考えを読み取る？」

サリアという普通ではない例を何年も目の当たりにしてきたのに、も関わらず、カリクの口からは訝しむような声が出た。

「そうらしい。あくまで、研究者たちとか、たまにくる軍人たちの立ち話を盗み聞きしてただけだから、正確さはないけど、話しぶりはマジっぽかったぜ」

「マジっぽかった、か」

理解はしたし、おおいにありえることであるのは分かっているのだが、素直には受け入れられなかった。ただ、仮にミッドハイムが本当に“オモイノチカラ”を持つのなら、力の存在を知っていた理由は簡単になる。自身が宿していたからだ。

「それで、お前はどんな実験に利用されたんだ？」

「あー、なんかよく分かんない実験さ。“後天的にオモイノチカラは発現できるか”とかいうやつだった」「力の発現か。ずいぶんとまた、ありがちなこった」

カリクは肩をすくめた。続けて問いかける。

「実験の内容は？」

「やったこと自体は簡単なもんさ。軍王の血を、注射したんだよ。要するに、血を被験者の体内に入れたわけ」

レインの口振りだと、たいしておかしくないことかのようなだった

が、とんでもないことだった。

「そりやまた、お手軽でイカレた実験だな。それで、お前に“力”はついたのか？」

行為の愚かさに、カリクは訝しげにまぶたを半分ほど閉じる。レインは、ニヤリとした。

「ああ。ついたぜ。いろんな人の心の声が聞こえるようになった」
「嘘つけ」

「あははは。まあ、分かるよな。カリク君の思ってるとおり、複数いた被験者の誰にも、力は発現しなかったよ」

カリクがツツコむと、あっさり本当のことを口にした。ふんと、鼻を鳴らす。

「だろうな。そんなお手軽に、“力”が手に入ったら、今頃そこらにゴロゴロしてるだろうよ」

それから、考えがサリアのことに及んだ。

「待てよ。じゃあ、サリアもその研究とやらに利用されるのか？」

「さあね。俺っちも、そこまでは分からない。一ヶ月前には、施設をもう逃げ出してたし。まあ、何かしらへ利用しようとしてるんだろうけど」

レインの言葉に、カリクは押し黙った。イカレた人間たちによる実験に巻き込まれるかもしれないというのは、不安要素としては大きすぎる。サリアが貴重な人材であることから、無理な扱われ方はしないだろうという予測があっても、拭い切れない。

「そういえば、あの施設はどうする？ 資料とかは、もうどうせ回収されてるだろうけど、俺っちの話よりも詳しく、あの施設がどんなものかくらいは見られると思うぜ。明日になっても、まだあの軍人がいるかもだけど」

カリクがしゃべらなかつたからか、レインから話を振ってきた。しかし、カリクは首を左右へ動かす。

「少しくらい、何か掴めればと思ってたが、時間が惜しい。このまま行つて、どこかで休んでから、首都に向かおう。ただ、首都への

道に乗っかるのは、明日の朝になってからだ。あの男も車で移動してて、俺たちが休んでるところを襲われたらどうしようもない」

「あー、それもそうだな。じゃあ、町から出る位置を、首都方面とは別のところにするか」

カリクの提案に従い、レインは車の向かう先を変えた。

しばらく走り、二人は町の外へ出た。ただし、首都とは別方面である。

「ここらでいいかな？」

「たぶんな。でも、交代で見張りをつけるくらい、やり過ぎな警戒をしてもいいかもしれない」

誰が映るでもないバックミラーを覗き込みながら、カリクはレインへの回答と提案をした。敵が未知数であるため、油断ができない。

「そうかー？ さすがに気にしすぎじゃねーか？ 後から足音が聞こえたのが研究者なら話は別だけど、あれも軍人なら、たぶん他の任務中だから、そっちを優先すると思うぜ」

「確かに。お前の言うとおりだ。だが、奴らを“普通”の枠に入れて、予測を立てるのは、個人的な見解としていい気がしない」

気にしすぎではというのは、カリク本人も思っている。しかし、一番大事なのがサリアを助ける前に死なないことである以上、考え過ぎな行動を選ぶのが安全策だった。

「ふーん。別にいいけどさ。でも、あんまり気を張りすぎると、いざつてときに疲れが出ちゃうぜ。少しは、肩の力を抜いてみたらどうだ？」

「抜けたらな。とりあえず、今日はもう休む。先にお前から寝ろ」

レインの話を受け流し、休息を促す。

「あれ、俺っちからでいいのか？」

「運転手が疲労で事故なんて、ごめんだからな。しっかり休んどけ。こつちが困る。それに俺はハンドルを握らないんだ。最悪、お前が運転してるときに休む」

「ああ、そっか。でも、途中で交代はするんだろ？」

「そのつもりだ。さすがに、夜通しは厳しい」

レインの問いを肯定し、カリクは銃を取り出した。

「……何すんの？」

「点検するだけだ。お前を撃とうってわけじゃないから、安心して寝てろ。明日も、また運転してもらわないといけないんだからな」

「へいへい」

休息するよう口を酸っぱくすると、レインは微笑した。座席を倒し、目を閉じる。

「じゃあ、お言葉に甘えて、先に休ませてもらいますぜ。おやすみ」
「ああ、おやすみ」

賑やかなレインの声が消え、カリクは静寂に包まれた。辺りの闇をときたま見ながら、銃の簡単なチェックを進めていく。

（本当は、解体してメンテナンスもしたいけど、さすがに敵を警戒してるときにそれはないか）

一人、頭を回す。知らず知らず、思考はサリアのことに移っていた。

（今頃、何してるんだろ。おかしいことをされていないといいんだが）

途端に、気持ちが焦り出す。早く助けないという感情が沸き上がってきた。ただ、頭は冷静なため、なんとか焦りを打ち消して落ち着こうと、自分と戦いだす。

（ダメだ。ここから首都までは、まだ距離がある。すぐさま助けには行けない。落ち着け）

深呼吸し、なんとか気持ちを抑えて現実に戻す。

（だいたい、なんで奴らはサリアを攫ったんだ。本当に研究のためだけなのか）

そのうちに、根本的な疑問へ考えが及んだ。なぜ、今なのかも気にかかった。

（ミッドハイムが軍王になってから、五年は経ってる。タイミング的な問題なのか、それとも何か別の理由が……？）

しばらく考え込んだが、答えは出そうになかった。また、サリアの身を案じ始める。

「サリア……」

思わず、少女の名を零した。心の内が、また荒れ出す。

「ずいぶんと寂しそうだな、カリク君」

すると、右側から少年の声が挟まってきた。当然ながら、レインである。寝る体勢になってから、さほど時間は経っていないため、起きていてもなんら不思議はない。油断していた自分に、カリクは軽く舌打ちした。

「ずいぶん、可愛いところがあるじゃないの」

「うるせえ。悪かったな、女々しくて」

「誰も女々しいなんて言っていないだろ。いいじゃんか。そういう風に、心から心配できる人間がいて」

からかい口調のレインだが、それでいてどこか真剣さを感じさせるものがあつた。疑念をそのまま言葉にする。

「お前にはいないのか。そういう人間は」

「……俺っちには、いない。孤児だからな。物心ついた時には、もう施設の中だったし」

常は軽薄な態度の少年だが、今は少し寂しげだった。何かを隠しているように感じる。

「そうかよ」

しかし、踏み込んで尋ねようとは思わなかった。一言で、話題を切る。

「なあ、そのサリアちゃんて、どんな子なんだ？　ちゃんと聞いたことがなかったから、気になるぜ」

話自体は終わらず、レインが別のことを挙げる。カリクは、軽くため息をついた。

「俺、寝ろって言ってるよな」

「分かってるけど、気になって眠れないんだよ。カリク君がサリアちゃんがどんな子か教えてくれたら、すっきり眠れると思うぜ」

声に棘を含ませたが、利き目はなく、額を押さえた。

「なー、いいだろー」

まったく嬉しくない猫なで声を聞き、銃を構えるかどうか迷ったものの、今はメンテナンス中であることを思い出し、その選択肢は捨てた。仕方なく、折れる。

「……分かったよ。でも、聞いたらすぐに寝るよ」

「了解、了解！」

レインは清々しさすら感じる笑みを浮かべた。どうにも子供っぽい。

「はあ……。なんでお前にこんなことを話さないといけないんだか」「まあまあ、いいじゃんいいじゃん。焼きが回ったってことで」

「それは、お前が言うセリフじゃないだろ」

もう一度額に手を当てて、ため息をついてから、ぽつりぽつりとカリクは話し始めた。

「あいつとは、サリアとは物心着く前からずっと一緒だった。正確には生まれたときからじゃないらしいが、ほぼ同じようなものだろう」

「幼なじみってわけか」

「そういうことだな」

「でも、ただの幼なじみじゃないんだよな、もちろん」

意地悪い笑みとともに、レインが目を輝かせる。

「好きに言ってる。わざわざ俺から話すようなことじゃない」

カリクは突っぱねるような態度をとったが、答えをはぐらかせてはいない。むしろ、明確に示してしまっているとも言えた。

「ふーん。そっかそっか。じゃあ勝手に解釈させてもらっぜ、カリク君」

「ふん」

調子づくレインに対してできたのは、鼻を鳴らすくらいだった。

「で、その幼なじみってどんな子なんだ？」

「そっだな……。ひたすらに穏やかで、優しい。素直だし、純粹で

もある。俺と真逆だな。空気が柔らかいんだ、あいつは」

何もかもを包んでしまえそうな雰囲気醸し出す少女の姿が、頭に浮かんた。そして、彼女の特徴はもつと深くにある。

「けど、それだけじゃない。サリアは、どれだけ邪険に扱われても、誰かを悪く言ったりしなかった。絶対に恨み言を持っていたはずなのに、俺にも言わなかった。誰も恨まないって、決めてるから。あいつは、強かった。きっと、今でも強い。俺なんかより、ずっとな」それは、“強さ”だった。特別、何かの訓練を受けたわけではない。生まれつきの能力はあるが、それとはまったく関係のない意志の強さ。

「なるほどなあ。カリク君がどれだけその子を大切に思ってるか、よく分かるぜ」

聞き手である少年は、どこに納得がいったのか、首を縦に何度か下ろした。

「何を基準に言ってるんだ、お前は」理由を問いただしてみると、彼はいつそう楽しそうに声を弾ませた。

「おつ、やっぱり無自覚か。簡単なことだよ。カリク君、俺たちの“どんな子か”って質問に、性格的なことしか答えてないじゃん」納得せざるをえないその理由に、カリクは返す言葉を見失った。

「俺たちは、外見のことも含めて訊いたのに、そっちはさっぱりだぜ。長いこと一緒にいると、そうなるもんなのか？」

続けての問いかけにも、明確な答えは出せそうになかった。なんとか、

「知らねえよ。比べる対象もないし」そんな言葉を口にした。

「ずっとサリアちゃん一筋ってか。言ってくれるね」レインが大袈裟に両手を開く。カリクは片手を顔に当て、息を吐いた。

「……やっぱり、お前には話さなけりゃよかった」

「後悔先に立たずだぜ」

「お前が言っな」

レインのおでこを軽く叩くと、いい音がした。「あいたっ」と声を上げ、少し頬を膨らませながら、さすり出す。

「もういいだろ。話は終わりだ。早く寝ろ」

「へいへい」

不満げに口を尖らせていたが、外見のことをしつこく尋ねてきたりはせず、彼はまた寝る体勢になった。

「ったく」

ようやく解放され、カリクは肩の力を抜いた。銃の調整を再開する。

黙々と作業を進めていき、数分後には終わった。ホルスターへ武器を戻し、一息つく。隣では、早くもレインが寝息を立てていた。振る舞いは元気だったものの、やはり疲れていたらしい。

「当たり前か」

長時間の運転に、廃屋でのやりとりである。疲弊しない方がおかしかった。

（俺も、なんだかんだ疲れてるしな）

ずっと気を張ったままである自分の疲れを認識する。確かに、レインに言われたとおり、このままではいざというときに動けないかもしれない。

（まあ、いいか。首都までの道はゆっくりさせてもらうさ）

そしてカリクは、朝まで見張りをすべく、車を降り、すぐ横でイメージトレーニングを始めた。座っていたら、眠ってしまうと思うたのである。

「レイン、起きろ」

翌朝、早い時間にカリクはレインを起こしにかかった。「んあー」

などとうなりながらも、ゆつくりとまぶたが開いていく。

「なんだ、交代かー？」

目をこすりながら、彼は身体を起こした。かなりぼんやりとしていたが、

「って、もう朝じゃん！？　どういうこと！？　起こしても起きなかったの、俺っち！？」

朝日の光が既に降り注いでいる光景を窓の外にみとめ、急速にギアが入った。黒目が大きく見開かれる。

「起こさなかったただけだ。それより、燃料を補給するのを忘れていた。この町に補給場所があるかどうかは分からないが、早朝のうちに探しに行くぞ」

そちらはどうでもいいと言わんばかりにさらりと彼の問いに答えると、カリクは話題を変えた。

「お、おう。それは分かったけど、お前寝なくて平気なのか」

「お前が運転してる隣で眠らせてもらうさ。早く行くぞ」

レインの発言はほとんど話半分くらいにしか聞かず、さっさと返す。

「そうか？　ならいいけどさ」

押し切られる形で、寝起きですぐに覚醒させられた彼は、エンジンをかけた。車が振動を始める。

「ていうか、供給場所があるとして、どこにあるんだ。どこ目指して走らせればいいの、俺っち？」

「中心よりは外周だな。ちよつとした補給なら、そこに建てた方が効率的だ。町の出入り口を徹底的に当たるべきだろうよ。万一なくても、次の町まで持つか？」

「ん、それは大丈夫だと思うぜ。この町、狭いし」

ハンドルを握るレインは軽く返し、アクセルを踏んだ。

「じゃ、いっちょ探しに行きますか」

二人を乗せた車が、また走り出す。

「いやー。そこまで厄介なことにならなくてよかったな、カリク」

「そこは同意してやる。下手な抵抗もされなかったから助かった」

「だな。金払ったし」

「通報はされるかもしれないけどな」

カリクとレインが乗る車は、燃料を満タンにして、再び首都へと向かう道を進み出していた。

補給場所には一人が駐在していたのだが、カリクが銃を突きつけ、その間にレインが燃料を拝借した。脅しをかけているのに、代金は払っていったのだから、ずいぶんと奇っ怪に思われただろう。

「こっから首都まで、あとどれくらいだ？」

「あと一日かかるか、かからないか、かな。順調に行けば、明日の昼には絶対着くぜ」

不思議な事件を起こして町を出たところで、カリクは首都までの時間を確認する。レインはこともなげに答えた。

「それも、施設にいたから分かるのか？」

「ちよつとした疑問をぶつけた。」

「ん、まあね。実験が主だったけど、軍人としての教育もしてたから、あそこは。武術も学問も、けっこう叩き込まれたぜ」

「養成学校みたいなもんか」

「いや、もつとキツいとこだな。本当なら違法な訓練もたくさんあったし。卒業したら、裏部隊ルートが大半だし」

「どうやら、俗に言う暗部の人員を育てる場所らしい。」

「裏部隊、か。じゃあ、サリアを攫った連中もその類いの奴らなのか？」

「大事な少女を連れ去った二人組を思い出す。」

「かもな。でも、微妙なところだと思うぜ。本当にそいつらが暗部連中なら、カリク君を殺してるだろうし、なによりカリク君から聞いたような時間には行動しないと思うぜ」

内部をいくらか知っているレインの言葉には説得力があった。加えて、カリク自身も、キュールで会った男女二人が暗部系の人間という考えにしっくりきていなかった。

「ただ、昨日会った奴は、間違いなく施設上がりの奴だ。醸し出す空気で分かる」

「あいつか。結局、奴に関しては何も分からなかったな」

昨日に接触した軍人のことへ、話題が移る。こちらは、何も知らないカリクすら、暗部の人間としか思えなかった。纏っていた雰囲気、あまりに危険だったのである。

「まあ、個人の情報はさっぱりだけど、用事自体は情報を消しに来たところだろうさ。秘密の施設の後処理なんて、いかにも裏の仕事だろ」

レインがもつともらしい意見を上げたが、カリクは首をひねった。それを見て、レインが尋ねてくる。

「何か、おかしいか？」

「いや、お前の意見は可能性として充分にあり得るんだが、あの建物は放棄されて久しそうな様子だっただろ。今更、残ってる資料なんてあったのか」

「あー、そつか。でも、全部を回収、処分できなかっただけで、残してあった資料に用があったとか、そんなだったのかもしれないぜ」

どちらの考えも、ありえそうだった。確定するには情報不足で、これ以上突き詰めるのは無理だと判断し、「分からないな」とカリクは首を振る。

「なんにせよ、あの施設が“オモイノチカラ”の研究をしていたなら、あの軍人も力に関わっているのかもしれない。また会うことになるかもな」

「そりゃ、ごめんこうむりたいねー」

続けて口にしたことに、レインはあからさまに顔をしかめた。いつでも軽い態度の彼ですら、冗談抜きで昨日の男とは関わりたくない

いらしい。

「同意見だ」

カリクも、できれば二度と遭遇したくない相手だった。具体的な理由云々というよりは、直感的に危険を感じたからである。

「にしても、“オモイノチカラ” ってのは、なんなのかね。特に害がある力ってわけでもなさそうだし。研究して、どうするつもりなんだか」

この疑問に、カリクは口を開かなかった。一番根本的なものであるのに、最も解答が見えないのだ。予測すらままならない。

（そうだ。どうしてサリアを誘拐したのかの前に、“力”の研究をしてどうするのが問題なんだ。稀有なものなのは確かでも、軍のトップへ何か恩恵をもたらすとは思えない）

首都に、施設に行けば、分かるのだろうか。カリクは、眼前に伸びる道を睨んだ。首都はまだ見えるわけもなく、道と原っぱの中を進むばかりだった。

それでも、二人を乗せた車は、着々と目的の場所へと近づいていた。

七章『それぞれの想い』

多くの軍人が、平時に勤務する本部基地。その中に、陸軍第二部隊という表記のプレートが掲げられた場所があった。辺りには、他部隊の表記も見受けられる。各部隊に与えられているデスクスペースだった。一人に一台、デスクは振り当てられている。そして、「ったく。軍人っていうのは、もっと現場重視の仕事場だと思ってたぜ」

自分のところで、溜めた書類と戦っているガヌ「ロードの姿があった。紙の山は、デスクの一角を完全に占拠している。サリアの誘拐は特別任務であり、裏部隊の所属ではないのだ。

「溜めるお前が悪いのだろう。その場その場で処理していれば、そんな量にはならん」

文句を口にする、背後から反応があった。振り向くことなく、言葉を返す。

「うつせー。俺はお前ほど、要領よくも真面目でもないんだよ」

「貴様のその言い訳は聞き飽きた。別の言い回しでも考えたらどうだ」

「あー、また今度な。それより、これ手伝ってくれませんか、シル様。なんか奢るから」

身体を捻って、会話相手を見る。その相手は、金髪のポニーテールの女性軍人、シルラ「マルノルフである。彼女はガヌと別の部隊だが、デスクの位置は謀ったかのように、すぐ後ろだった。

「お前の仕事だろう。お前でなんとかしろ。それに、私もこれから“仕事”だ」

彼女は、壁にかけてある時計に目をやった。示している時間は、午後六時半。ガヌは、それだけで何かを察する。

「ああ、そうか。そっちがあるのか」

口には出さなかったが、サリアの見張りのことである。

「仕方ないな。じゃあ、明日はどうだ？」

「自分でやれ！」

頼る気をなくさずに、提案してみたものの一喝された。そのまま彼女は背を向け、歩き出す。

「つれないねー」

ガ又は一人で肩をすくめた。姿勢を直し、再び書類の山と対峙する。

「頑張つてやりますか」

と、やる気を出そうとしたところで、

「ガ又中尉」

低く重たい男の声が降ってきた。ため息をついてから、顔を左上に向ける。

「なんの用だ。わざわざ、“普通”の部署まで顔出すなんて」

「いえ、少し報告したいことがありますね」

がっちりとした体躯で、岩を思わせるような男が、濃い顔に合わない微笑を浮かべる。階級は准尉だが、彼の属する裏の部隊では、位などあつてないようなものだった。

名前は、ノーザン＝ジャッジといった。

「で、報告つてなんだ。さっき見たとおり、俺は忙しいんだが」

「そのようですね。まあ、僕もああいうちまっこいものは嫌いですが、あそこまで溜まったことはないのです、どの程度かは想像の域を出ませんが」

ノーザンは遠回しに皮肉を言ってきた。多少かんに障ったものの、時間が惜しいので流す。

「分かつてるなら、さっさと済ましてくれ」

「了解しました」

屈強な男は、意地の悪そうな笑みを浮かべた。理由もなく、悪寒

を覚える。早く、この場から立ち去ってしまいたかった。

「では、ご注文のとおり手短に済ませましょう。単刀直入に言いますと、レインに遭遇しました」

しかし、会話に出てきた名前を耳にして、その気は失せた。一度、目を大きく開いてから、軽く首を振って問う。

「どこでだ」

「シャズの町です。そこでの任務中に出くわしました」

「シャズだと？」

ガ又は、顔をしかめた。シャズの町は、特に何もない小さな町のはずだ。とても裏部隊の人間が、任務で赴く場所に思えなかった。あつてせいぜい、殺さなければならぬ人間が隠れ住んでいるとか、そのくらいである。

「ええ。あなただからお話しますが、あそこには“ジーニアス”の施設があつたんです。今はもう稼働していませんが、その資料処分を任されたので、足を運んだんです。そうしたら、彼と遭遇しました」

本来なら秘匿すべき情報を、ノーザンはためらいなく話す。理由は察しがついた。

（俺の反応を見たいんだろうな）

短い付き合いではあつたが、目の前の男は自分の楽しみを優先させるタチであるのを、ガ又は把握していた。その上で、また尋ねる。「それで、レインをどうしたんだ」

声には敵意がこもっていた。向こうが面白がるだろうとは思つたが、隠すことができなかったのである。

「どうもしてませんよ。殺そうとしましたが、取り逃がしてしまいましたからね」

逃がしたという単語に、ガ又は一旦肩の力を抜いた。同時に疑問も抱く。

「取り逃がした、か。いくらジーニアスにいたとはいえ、お前が高校生そこの歳の奴を逃すとは思えないんだが」

「ええ、まあ。自分で言うのも変ですが、レイン一人なら、始末できていたと思います」

「一人なら？ 誰か他にいたのか」

心当たりがなかった。

「ええ。同い歳くらいの少年が一緒でした。何者か分かりませんでした。僕に対して冷静な態度だった上に、銃を所持していて腕もよかったですから、ただ者ではないかと」

「銃の腕がいい、か」

「誰か心当たりでも？」

「いや、ないな」

ノーザンの話を聞き、ガヌの脳裏にはキュールで出会った少年が浮かんた。しかし、レインと一緒に行動するような経緯が想像できず、その考えを打ち消す。

「とにかく、その少年とレインの二人を取り逃がしました。ですが、おそらくあの二人は“ジーニアス”に何かしらのアクションを起こそうとしている。遠からず、首都にも来ると思いますよ」

「“ジーニアス”にねえ。一度逃げてきた奴が、そのこのこ戻って来るもんか？」

抱いた疑問を口にする。ノーザンはせせら笑った。

「戻って来ますとも。現に奴は、元とはいえ“ジーニアス”の施設に来た。それも、何かの目的を持っているのだろっ少年と。大きな流れに、人は抗えやしない。もう、すべてが流れ出しているんですよ、ガヌ中尉」

意味深だった。意図は読めないが、気味の悪さだけは十二分に伝わる。

「それに、あなたの場合は首都に“来てほしくない”んでしょう？」
続けてされた指摘に、ガヌは息をのんだ。何も言うまでもなく、その反応が答えになってしまっていた。

「では、僕は失礼します。面白い反応も見れましたしね。それでは」

満足そうな様子で、ノーザンは歩き去っていった。一人、ガヌは取り残される。

「レイン、戻って来ないでくれよ……」

独り言は、廊下へ吸い込まれていった。

同刻、地下にシルラの姿はあった。サリアの捕らえられている部屋の前にたどり着き、外の見張りをしている男の部下へ声をかける。
「お疲れ様」

「ああ、シルラ中尉。お疲れ様です」

「あの子の様子は？」

「さあ……。自分は、中の様子を見ていないので、なんとも分かった」

うなずき、部屋への扉を叩く。

「私だ。シルラだ」

しばらくして、中から女性の部下の顔が覗いた。

「お疲れ様です、シルラ中尉」

「お疲れ様。交代の時間だ。帰るといい」

「はい。ありがとうございます」

彼女は礼儀正しく頭を下げると、

「それでは、お先に失礼します」

地下室から離れていった。入れ替わりに、シルラは部屋へ入る。

「サリア」

後ろ手で扉を閉めると、中にいる少女へ声をかけた。ベッドの上で、横になっている。返事がない。眠っているようだった。音を立てないように、忍び足でそばへ行く。可愛らしい寝息を立てていた。思わず、頬を緩める。

「カリク……」

しかし、次に彼女が発した寝言に、シルラは固まった。目の前の

少女は、それほどなんともないように見えていたが、不安を抱えていて当然なのだ。

（私は……）

軍人は、上の命令を聞かなければならない。士官学校では、そう教わった。シルラは絶対に守ろうというほど正しさを信じていたわけではないが、今は守ることが正しいとは考えられなかった。

（私は、どうすれば）

表立って動く気はなかったのに、心は揺れ出していた。

任務を受けたのは、一ヶ月ほど前だった。仕事中に、いきなり呼び出されたのである。初めて軍王の座する執務室へ行くことになり、扉を叩くことにも酷く緊張した。

「シルラⅡマルノルフ中尉です」

「どうぞ、入りなさい」

「失礼します！」

返事が上擦ったのだが、恥ずかしがる余裕すら持てず、とにかく中へ入った。するとそこには、

「あれ、シルラも、ですか」

ガヌの姿があつたのである。

「な、なぜ貴様もここに」

「呼び出されたからに決まってるだろ」

驚いていると、肩をすくめられた。彼の言い方にむっとすると同時に、安心感も覚えていた。

「ええ。私が呼んだのです」

軍王、クラカルⅡエルⅡミッドハイムの声が挟まった。シルラは慌てて彼の机の前へいき、ガヌの隣に並んだ。

「あなた方は、我が軍の中でも、特に優秀な若手と聞いています。そこで私は、今回あなた方に特別な任務を言い渡そうと思ったので

す」

「特別な任務、ですか」

ガヌは気のない反応だった。彼は、どんなときでも彼だったのである。

「ええ、そうです。なので、あまり乗り気ではないにしてもやっていただきますよ」

ミッドハイムがにこやか微笑んだ。すると、ガヌはわずかに眉をひそめた。シルラも、目の前にいる軍のトップに、恐怖感を抱いた。「あなた方に頼むのは、ある少女の誘拐と、監視です。それ以外は、何もありません。簡単な仕事でしょう」

「誘拐……」

汚い仕事が多く存在している中で、なおかつ軍王からの直々の依頼だとそういう系統の仕事の可能性が高いと知っていたものの、それでもシルラは、提示された任務の内容を疑った。犯罪が任務というのは、納得がいかなかったのである。

「ええ、そうです。そこにいる、ノーザン・ジャッジ准尉とあたつてもらいます」

「えっ？」

軍王から見て、二人の右奥に彼の視線がいったところで、シルラは間抜けな声を出してしまった。振り返ると、それまで気づかなかった、がたいのいい男が壁に体重を預けて立っていた。言われるまで、まったく気づかなかった。

「彼はあなた方の噂にある、裏の部隊の者ですが、今回の任務を共に行ってもらうことになります。ただ、メインはあなた方にお任せするので、そのつもりで。まあ、仲良くするといいでしょう」

ミッドハイムが説明する間に、ノーザンは二人の方へと近づいてきた。ゆつくりと重々しく口を開く。

「ノーザン＝ジャッジ准尉です。よろしくお願いします」

気味悪い微笑と共に、ノーザンは自己紹介してきた。どうにも、仲良くはできそうになかった。

「ああ、よろしく」

それでも、あいさつはなんてことのないように返した。隣のガヌは、

「んー、そこまで仲良くはしたくねーな」

と、正直な感想を口にしたが。

「どうやら、彼に対してお二人共あまり友好的ではないそうですね。まあ、仕事はしっかりこなしてください」

やりとりを黙って見ていたミッドハイムが口を出し、会話をまとめた。これはまだ、観察だけで分かる範囲ではあるが、シルラは内心を見透かされているような気がしていた。頭に浮かんだのは、ミッドハイムに関するある噂。

「ミッドハイム総督。なんか、俺らの考えてること、見透かしてません？ なんでも噂じゃ、人の考えてることが読み取れるとか聞きますが、それが本当だったりするんじゃないですか」

それをガヌは、ためらうことなく真正面からぶつけた。ミッドハイム軍王は人の心を読める、という話がかかり前から存在していたのである。

「ええ、本当のことですよ。私は、他人の心を読むことができます。心理学などの類いではなく、もっと直接的に」

問われた彼は、隠す様子もなくあっさりと認めた。あまりに軽すぎて、シルラは信じられなかった。ガヌも同じ考えだったようで、「にわかには信じがたいですね。手品の範疇とかなんじゃないんですか」

訝しげな表情を、軍王へ向けた。

「そう簡単に信じなくとも、別にかまいませんよ。そこは大事じゃありませんから。とにかくにも、あなた方はこれから話す任務をこなしてくださいね、それで充分ですからね」

彼は回答をはぐらかし、任務についての話を始めた。誘拐の対象が、特別な力を持った少女だと聞かされたところで、シルラは問いを挟んだ。

「その子を攫うことに、どんな意味があるのですか」

「我が軍のため、とだけ言っておきましょう。彼女の力が、我々の利益になるのです」

「力？」

「ええ。私の力と通じるものですが、彼女は自分の意思を、言葉を使うことなく直接我々の心へ伝えることができます。俗に言う、テレパシーのようなものです。かつての記録で、我々の持つ力へつけられた名前は、“オモイノチカラ”。彼女はそれを有しているのですよ」

これもまた、到底信じられない話だった。テレパシーのようなものと言われても、それはあくまで虚構の世界にあるものなのだ。例にされたところで、納得がいくはずもなかった。

「疑うのも無理はありませんが、とにかくこれは命令です。どれだけの疑問を抱こうとも、従ってもらいますよ」

口調は柔らかなままだったが、有無を言わせぬ威圧感が入り混じっていた。雰囲気は吞まれ、シルラは何も言えなくなった。

「……それくらい分かってますよ。ただ、やり方はこっちに任せてもらっていいですかね」

代わりに、ガナが不機嫌な声色でしゃべる。彼も、疑問を持っていくようだった。

「ええ、かまいません。サリア・ミュルフを私の前に連れてきてくれさえすれば、あとは何をしようと自由です。私へ反抗することも止めません。その結果どうなるかは、何も約束できませんがね」

ミッドハイムの返答は、脅しだった。シルラにはガナが何を思っている、やり方は自分たちの好きにさせるよう求めたのか分からなかったが、滅多にシリアスさを出さない彼が、引きつった表情を見せた。「とにかく、しっかりと任務をこなしてください。これは、最重要の任務と言っても過言ではありませんので。詳細はまた後日としますから、今日のところはもう退室していただいて結構ですよ」

部下の反応には気づいているに違いなかったが、触れることなく、

ミッドハイムは退室を命じた。

「……失礼します」

子供のように、ガヌは露骨に機嫌を損ねていた。足早に扉へ向かっていった。

「私も失礼します」

シルラも頭を下げて、逃げるように彼へ続いた。こうして、ガヌと執務室を後にしたわけである。ノーザンは、一緒ではなかった。

しばらく、無言で廊下を進んでいたのだが、途中でガヌが口を開いた。

「シルラ」

「なんだ」

「お前、あの任務をどう思う」

訊いてきたのは、簡単なことだった。キッと、睨みつけるような目線を送った。

「あの内容で、私が楽しみにしていると思うなら、お前はたいした目利きだ。眼科に行った方がいい」

強い口調で答えた。得体のしれない恐怖から解放され、いつもの調子を取り戻していたのである。

「お前なら、きっとそうだと思ったよ。なら、協力してくれないか、シルラ」

「協力？」

「ああ。任務は成功させる。ただ、“完璧”にはこなさない。とっかかりを作る」

「とっかかりって、どんなだ」

突拍子のない発案だったが、否定はせずに話を聞いた。ガヌの目が、いつになく据わっていたというのもあった。

「それはまだ分からないが、裏部隊の奴らだけじゃなく、俺たちをこの任務に当てた理由が必ずある。ということは、対象であるサリアって子のことを調べたら、何かが見つかるかもしれない。そこが、とっかかりになるはずだ」

彼の言葉は、力がこもっていた。確かな可能性はなかったが、シルラは迷わなかった。

「なるほどな。実にお前らしい、不安な作戦だ」

まず皮肉を放ってから、

「だが、そこでためらわないお前を評価して、協力してやろう。会ったこともない少女だが、理不尽に巻き込まれるという時点で、助けることに疑問はいるまい」

彼への全面的な賛成を表明した。目を合わせてうなずく。

「だが、軍王はどうする。もしも、奴の話が本当であるならば、次に会ったときにバレてしまうぞ」

「問題ないさ。こつちが目的を達成できるんざ、奴は思ってない。何を考えてるのがバレても、釘を刺されるくらいで、本気で止めにはかからないだろう。さっきも言ったが、わざわざ俺たちを選んだ理由があるんだからな」

シルラの持ち上げた問題点へ、彼は間髪入れずに解答を示した。

「ずいぶんと自信満々だが、何か確証があるのか」

ただ、どう考慮しても不十分であった。予測はついていたが、一応尋ねてみた。

「ない！ 全部推測だ」

案の定、はつきりと証拠はないと返され、思わず笑ってしまった。

「ははは！ さすがだな。やはり、貴様は理解できん」

「んあ？ なんだよ、仕方ないだろ。分からないものは分からないんだ。でも、だからって全部を受け入れるわけにもいかねえ。可能性があるなら、そこに賭けるぜ、俺は」

笑われたことに対し、彼は口を尖らせた。なんとか笑いを抑えて、言葉を足す。

「すまん、すまん。別に、貴様を馬鹿にしているわけではないのだ。私だって何も妙案は思いついていないしな。ただ、あまりに貴様がいつもどおりに根拠のない自信を持っているものだから、おかしくてたまらんだ。ふふ、あはははは！」

そのうちに、シルラは我慢できずにもう一度笑い出した。廊下を歩いている他の人間たちが目を向けてきていたが、まったく気にならなかった。

「なーにが、そんなにツボに入っただのかねえ」

ガヌは呆れたような声を出したが、彼も口元が弛んでいた。

「私も分からん。とにかく、おかしいのだ。なににせよ、私たちでなんとかするぞ、ガヌ」

「笑いながら言うかー、そういうこと？ まあ、同意するけどな」
こうして、二人は攫う対象たる少女を救うために、動き出したのであった。見通しは暗かったが、ガヌがいるなら、シルラには希望が途絶えることはないように思えた。

事実、彼らの行為は無駄にならなかった。少女のすぐ近くに、軍の語り草となっているトルマシエードと、その息子でありエリート街道を歩む実力者のニックシエードの姿があることが分かった。ガヌの見立てだと、ミッドハイムは裏部隊の人間を派遣した場合に捕らえられたときの情報流失を恐れているのではないかということだった。

そこで二人は、ニックシエードとの連携を考え出した。しかし、その矢先に彼は首都から弾き出されてしまった。軍王から二人への牽制なのか、それとも元々遠ざける予定だったのか定かではなかったが、助力者になりうる人間が、首都から一人いなくなってしまうたのである。

だが、二人はあきらめなかった。まだトルマシエードの存在があったし、首都から離されたことで、シエード親子が陰謀に気づく可能性は、十分にあったからである。ただ、トルマが表に出てきたとしても、二人には、任務をしくじるわけにはいかないという共通認識があった。任務に失敗して、自分たちが処分されるのは、避けなかったのである。死んでは元も子もない。

なので、任務には支障をきたさない程度に、あらゆる部分で“きっかけ”を作るようにした。同僚たちに任務内容をばかして伝えて

みたり、サリアの誘拐を昼間に決行したり、行き帰りはわざと人目につく場所を通ったりと、誰かが自分たちの行為に気づき、アクションが起こることを期待したのだ。

（そう、“何か”を待っている。ニックシールドでも、トルマシールドでもいい。何か、動きが起きればと）

二人自身は、期待している外部からの“何か”が起きるまでは、動かないと決めていた。先んじて動き、軍王に見咎められてしまうと、いざというときに動けないためである。

しかし、サリアのつぶやいた言葉に、シルラは揺れている。本当に、あるかどうかは確かではないきっかけを待つしかないのか、と眠り続ける少女を見下ろす。答えは、もう心にあった。

「ふん。どうせ、階級に興味はないしな。私が軍人になった理由を、まっとうしないのでは、ここにいない意味がないだろう」

初志を思い起こし、決意を固めていく。

「“護りたいものを護る”。それだけのことだ」

待つだけをやめる。組織に属する身であるシルラにとって、危険きわまりない行為だった。それでも、譲れないものがある。

「貴女に、悲劇は似合わないしな。好きな人間のそばで笑えるように、精一杯努力しよう」

少女の髪を、優しく撫でた。まだ幼いとはいえ、彼女にはもう大切な存在がいる。シルラは、少女をそのそばへ返してあげたかった（ガヌには、伝えんといかな。引き止められるかもしれんが、ここは譲れん）

決心したところで、一緒に少女のことを考えてきた同輩のことがよぎる。心配してくるに違いないとは思ったが、彼が相手でも今の気持ちは曲げるわけにはいかなかった。

シルラが少女のために動くことを決めた頃、ノーザン・ジャッジは、軍王の座する執務室にやってきていた。

「それで、資料はまだ残っていましたか？ シャズの町にあった施設は、規模こそ小さかったですが、優秀な検体がいましたから、なかなか興味深いものも多く残っていたかと思いますが」

口火を切ったのは、ミッドハイムである。例によって、顔には微笑を浮かべていた。

「優秀な検体ですか。はは。まあ、確かに“力”をすでに持っていましたからね。研究者たちも、かなり盛り上がっていたようです」
ノーザンが声を上げて笑い、持ち帰った資料をぞんざいにミッドハイムの机へ投げ置いた。かなり傷んでいたが、軍王は口角をさらに上げる。

「素晴らしいですね。まだ、こんなにあったとは」

上機嫌に、紙やファイルをいじり出した。動作自体は子供のようなのだが、可愛らしさはない。見た目などの問題ではなく、何かしらの恐ろしさがあった。

「しかし、どうして今更、あそこの資料を？ 主要なものは首都に移したのでしょうか」

それを肌で感じつつも、ためらうことなく、質問する。資料から目を離さずに、ミッドハイムは言葉を返してきた。

「ええ。私の求めていた“力”とは、また別物でしたから。ただ、サリア・ミュルフを手中にした今、あらゆる面からの調べ直しが必要になるのですよ」

彼の求めている“力”については、ノーザンも詳しく知らなかった。なので、最終的にどうしたいのかも分からない。

「へえ……。しかし、遠くからしか見ていませんが、あの少女がそんなに大事な存在だとは、信じられないですけどね」

軍王が出した少女の名前に反応し、率直な感想を漏らす。

「否定はしません。彼女の価値が分からなければ、そう見えるでしょう。情報を持っていなければ、ダイヤも石ころと同じです。ただ、ダイヤに値するための力を、彼女が既に発現しているかどうかは、定かではありませんが」

それに対する相手の返しに、ノーザンは首を横に傾けた。

「発現？ ジーニアスの研究では、“オモイノチカラ”は先天的なもので、生まれた時点で、もう発現はしているとかいう話ではありませんでしたか」

「普通ならその通りです。ですが、ただでさえ稀有である“オモイノチカラ”の力の持ち主の中でも、彼女はさらに特別な存在なのです。世界を変えられるかもしれないほどに」

答えながら、軍王は自分のイスの背もたれへと体重をかけた。静かに目を閉じる。

「私は長い間、それを追い求めてきたのです」

「貴方にそこまで言わせるとは、いったいどんな力なのか余計に気になりますね。そろそろ聞かせていただけませんか」

国の頂点に立った男が、長きに渡って求めてきたものに興味があった。

「まだ、詳細を話す気にはなりませんね。時が来れば、おのずと分かるでしょう。貴方が察するか、私の口から明らかにされるかは、断定できませんが」

しかし、ミッドハイムは答えなかった。どこに目線を合わせるでもないが、わずかにまぶたを持ち上げる。

「今日は、もう結構ですよ、ノーザン准尉。まだ懸案事項がいくつかありますから、明日からはそちらを任せることになるでしょう。レインが現れたというのを、私に報告してこなかったのは、見逃してあげますので」

「……それは、どうも」

（本当に、かなわない人だ）

たぶん、これも読まれているだろうと思いながら、内心で冷や汗

をかいた。

「あー、まあ、今日はこんなとこでいいや」

報告書類の山を、全体の四分の一程度片付けたところで、ガヌはペンを置いて背伸びをした。周囲のデスクには、既に誰もいない。

「さつとと、あいつはまだサリアちゃんの監視か。ご苦労なことって頭に、自分も行ってみようかという選択肢が浮かんだが、首を振って打ち消す。」

「ダメだ。俺は、ダメなんだ」

自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「貴方の人生ならば、貴方の好きに生きればよいのではないですか」そこに、柔らかな声が飛び込む。ガヌが扉の方へ顔を向けると、ミッドハイムが立っていた。

「……それは、何に對してですかね」

「好きに解釈なさって結構です。シルラ中尉のことでも、レインのことでも、その他のことでも」

「さいですか」

心が読めるのなら、言葉による駆け引きは意味をなさない。自然と手が汗ばむ。

「そんなに身構えなくても大丈夫ですよ。私は、貴方に新しい任務を命じに來ただけですから」

そんな心内すら見透かし、ミッドハイムは穏やかに微笑む。

「新しい任務？」

「ええ。明日の朝一番に、ニケアのニック少将のところへ行ってください」

「ニケアへ？」

「はい。彼を、暗殺していただきたいのです」

「……なんですって？」

「ニック少将の暗殺です。嫌とは言わせませんよ。断れば、女性が一人亡くなることになりますから」

思い当たる人物は、たった一人だった。

「シルラが人質、ですか」

「さあ、どうでしょうね」

ミッドハイムはうそぶくだけだった。

「とにかく、任務を達成してください。大切な人を失いたくなければ」

勅命書をガヌのデスクに置き、彼はその場から去っていった。

「……困ったね、こりゃ」

ガヌは、一人勅命書を指で弾いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004x/>

オモイノチカラ

2011年11月30日20時57分発行